

人形浄瑠璃

文樂座
五月興行



電気協会天九回定時總會御出席者招待

電気協会関西支部
有志聯合会会務招待会



文樂座 四ツ橋

定價五十錢

青葉薫るはつなつ五月。

プラタナスの若葉には生々した近代色の香りが漂つてゐます。クラシカルシーンを近代都市の眞只中に映す文樂座にも郷土の初夏が訪れました。絢爛より清新へ躍進した國粹藝術は今や精氣満點です。三〇年劇壇の人氣を一つに蒐めてゐる四ツ橋文樂座の五月興行は巨匠連に花形軍の總出陣です。いみじき情懷に近代的芳香高き美と興趣の殿堂あなたの文樂座は茲によりよき好箇の名作を揃えました。日頃の御厚情にお應へ致すべく文樂座秘藏曲目を颯と展列。いたしました早々お運びのうへこの新緑五月の郷土色を満喫して下さいますやうに。

昭和五年五月

四ツ橋 文樂座

昭和五年五月三月初日

初日 午後二時 開幕
二日 午後三時 開幕
三日より 午後三時 開幕

二日目の

・御觀覽料・

- 一等お座席 御一名 金三圓五十錢
- 一等椅子席 御一名 金三圓
- 二等席 御一名 金一圓五十錢
- 三等席 御一名 金八十錢

一等お座席は五日前より
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七二番
専用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ありますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

南一温泉料理

電話南西
長 七七一五六
一〇一三二六
一一二九三〇
番番番番番

大阪四ツ橋



Vertical text on the right edge of the page, likely a date or publication information.

Vertical text on the bottom right edge of the page, possibly a publisher or printer's name.

天樂堂

三味線

三味線

白濁... 三味線... 大太夫

三味線... 大太夫

三味線... 大太夫

三味線... 大太夫

三味線の... 大太夫

Dense vertical text columns, likely a list of names or prices.

三味線... 大太夫

Main body of text, organized in columns, possibly a catalog or list of items.

Vertical text on the bottom left edge.

新緑の折柄各位彌々御清榮慶賀此事に存じます
 借て今回電氣協會第九回定時總會を當地に於て開催致され全國各地より會員諸彦多數御集會成られますに際して當關西支部會員有志相計りまして茲に招待會を催しました處連日の御會合にて御疲れの折にも不拘多數御來會下されました事は本招待會の誠に光榮に存ずる次第で御座います
 然るに何分劇場内の事とて充分の接待も出來ませず不行屆きの所は何卒御容赦を願ひます
 本文樂座人形淨瑠璃は古今東西に其の名聲高く浪花郷土の誇りとせられて居りますが今春大大阪の都心部に改築せられて麗はしい新装を現はし愈々益々本邦唯一の古典藝術の殿堂として其の重き使命を有して居る事は既に諸賢の御承知の通りで御座います何卒ゆる／＼御觀覽の程願ひます
 尙當地方物産二三取揃へましたから御厄介ながら御持歸り下さらば仕合せに存じます

一言以て御挨拶と致します

昭和五年五月十三日

- 大 阪 市 電 氣 局
 阪 神 電 氣 鐵 道 株 式 會 社
 阪 神 急 行 電 鐵 株 式 會 社
 日 本 電 力 株 式 會 社
 東 京 電 氣 株 式 會 社 大 阪 出 張 所
 大 阪 電 氣 軌 道 株 式 會 社
 大 阪 電 球 株 式 會 社
 大 同 電 力 株 式 會 社 大 阪 支 店
 南 海 鐵 道 株 式 會 社
 宇 治 川 電 氣 鐵 道 株 式 會 社
 京 阪 電 氣 鐵 道 株 式 會 社
 合 同 電 氣 株 式 會 社
 京 都 電 燈 株 式 會 社
 株 式 會 社 住 友 電 線 製 造 所
 大 阪 鐵 道 株 式 會 社
 株 式 會 社 井 上 電 機 製 作 所
 日 本 電 氣 池 株 式 會 社
 日 本 電 線 製 造 株 式 會 社
 日 本 電 線 株 式 會 社 大 阪 出 張 所
 中 國 合 同 電 氣 株 式 會 社 姫 路 支 店
 大 阪 電 力 株 式 會 社
 大 阪 陶 業 株 式 會 社
 大 阪 變 壓 器 株 式 會 社
 株 式 會 社 大 阪 電 機 工 業 所
 株 式 會 社 川 崎 造 船 所
 關 西 聯 合 電 球 株 式 會 社
 古 河 電 氣 工 業 株 式 會 社 大 阪 販 賣 店
 富 士 電 機 製 造 株 式 會 社 大 阪 販 賣 店
 神 戶 市 電 氣 局
 山 陽 中 央 水 電 株 式 會 社
 汽 車 製 造 株 式 會 社
 京 都 電 機 株 式 會 社
 湯 淺 蓄 電 池 製 造 株 式 會 社
 三 井 物 産 株 式 會 社 大 阪 支 店
 三 菱 電 機 株 式 會 社 神 戶 製 作 所
 松 風 工 業 株 式 會 社
 株 式 會 社 日 立 製 作 所 大 阪 營 業 所
 株 式 會 社 住 友 製 鋼 所
 (以上順序不同)

電氣協會總會御出席者各位

絢瀾より清
新へ躍進し
たる國粹藝
術の總出陣

櫻景清 八嶋 日記

日向嶋の段(三時開幕の豫定)

御休憩時間 三十分間の豫定

戀女房 染分 手綱

重の井子別の段(四時二十分開幕の豫定)

御食事時間 二十分間の豫定

近頃河原の達引

堀川掻廻しの段(七時開幕の豫定)

御食事時間 二十分間の豫定

ひらかな 盛衰記

神崎掛屋の段(八時廿五分開幕の豫定)

御休憩時間 二十分間の豫定

山姥

那物語の段(九時四十五分開幕の豫定)

打出し(十時三十分の豫定)

(舞臺装置 松田種次)

文樂座

人形浄瑠璃





文樂座由來

人形淨璃瑠緣起

當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大阪高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晚秋不慮の災禍に喪失し其後本城を物色中このほご四ッ橋に新築いたしました、而も

日本にこれ一座きり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかご考へます次第で御座ぬます。序でなから此人形は大體、首、胴、手及び足の四部に分ける事が出来、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんびし(檢非違使)と云ふのは、竹本座の『用名座天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋の盛綱』のいこき、なほ之の眠り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之です。然し南



義肩附
太衣品
夫一
本袴式

大阪市南區東清水町
電話三八三九番

野村青空

水漫遊などを見るに別になつて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盡鳴こありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事がある云ひます

兎もあれ菅相丞や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で、矢張竹本座へ近松が書いた『日本振袖始』から出た人形だま申します。それから若男

さいふのは源太も呼んでゐるこか聞きますが持役としては『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隔へ張を入れ其眉を引きつめるこ『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などを

云ひます。又所謂おやまの中にはおむすこ云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染『壺坂』のお里『妹背山』のお三論などを勤める

のもあります、南水漫遊に傾城もあるのも多分之と同じものか考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目も擧げられて居るのであります。

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に始まつたもので、傀儡子の名

は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧

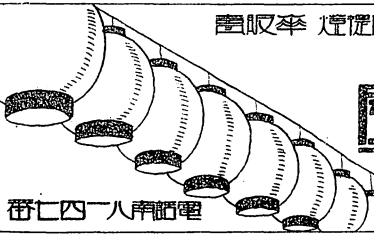
の民で、男は狩を表業に、木、偶や土の偶を舞はせたご御座います。其當時に、四三三云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚

松本各劇團達川津屋

芝居

芝居屋

大阪府東区南船場



電話一八四七番

な物には相違なかつたでせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、と云ふ想像は出来ない事もあります。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いて居たらしく御座います。浄土宗の起るに至つて、傀儡子の大方は浄土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたもので、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの據頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末なむら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲

に始めて三味線上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形と此三者が綜合される事に成りましたのが、慶長年中、即ち徳川の始頃ですが、忽ちにして京では四條五條の如き或は江戸の堺町とか葺屋町とか、櫓が立つて此人形芝居も繁昌したのであります。順序として當然此頃には最う人形の類も増してはゐたのですが、然し舞臺などは固より無く其人形さて首もあるばかり、遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖口へ出されて舞されたもので、大阪の石井飛彈椽が始めて其手足の工夫もしたものですか。由來此椽なるものは人形師の所有なりしを後に淨瑠璃大夫の勢強くこれを専らにするに至つたこの事。さて竹田のからくり人形が出來たり、野呂松ののろま人形が出

大阪島之内
 廣田八千堂
 番字三五五番
 美 術
 扇 子
 各種印刷
 紙製品
 摺 物

來たり、次郎三郎おやま、人形を使つたり、殊には彼の元祿時代になるまで大阪へ義太夫が現はれて竹本座をはじめ、又近松翁が現はれて此義太夫節のために人形芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書き卸し、しかも其人形遣ひとしては辰松八郎兵衛と云ふ名人が出て、今の出遣ひの如きも此人によつて始まつた云ふのが、始めは此人形を下の幕と上の顔隠し幕の間から出して遣つてゐたので、畢竟人形の動くに従つて自然遣ひ手の身体も動く之が見好くないから黒幕の陰に黒頭巾して遣つてゐたものを、愈々今度八郎兵衛も、袴を着て手摺を離れ無量の手妻を遣ふに其全身少しも亂るゝ事がないといふ評判を取つたのであります、加之他方また豊竹座の出来るあり、即ち西

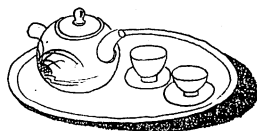
と東と同じ大阪の地に於て太夫三味線、作者から人形遣ひと全く競争的に繁昌を來したのですから、従つて其進歩發達は眼覺しいものがあり、道具建から人形衣裳總ては美々しく立派やかを盡し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら山簾を本山の張ぬきにするやら、太夫も出語りをするやら、例へば人形にしてからが先づ眼が動き、指先が動き、享保の末には竹本座『大内鑑』の與勘平彌勘平が腹をふくらまし、元文になる豊竹座『武烈天皇鐵』の佐手彦の眉を動かしてはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手が輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戦』に初出勤錦舎の出遣ひに片手の晴業を

標商 且 録堂

蒲茶十笠

秘業商

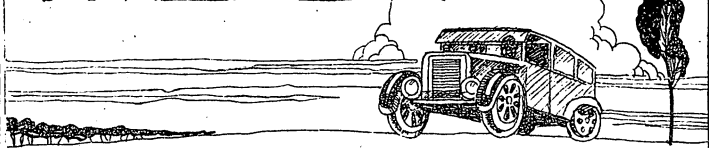
番一六二町初話電 橋江御阪大



示して以來さいふものは實に此人形についで工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある『夏祭』の人形に始めて帷子衣裳を着せるさか、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子黒縹子の前帶淺黄の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で眞似ての所事實此時代さいふものは繰盛んを極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立して其眞實は凄まじい有様であつた云ひます。江戸でも矢張之と同じく、慶長の昔薩摩浄雲が淡路の人形舞しと此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居も誠に繁昌してゐたのです。享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てから云ふものは又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似の

み演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になる漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、結局あの大坂の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたを見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長も今日に至れり云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。

マローパ自動車



日向島の段

嬢景清八嶋日記

中竹 町太夫 貴鳳太夫

日向島まで

鶴鶴鶴 澤澤澤 友友友 芳之助 友之助 友之助

切鶴竹 澤本 友津次 友太夫 友太郎

人形

一、悪七兵衛景清 吉田 榮三

一、肝入佐治太夫 桐竹 政龜

一、娘 糸 瀧 吉田 文五郎

一、尼野四郎 吉田 玉幸

一、土屋軍内 桐竹 門造

この狂言名題は俗に「言景清」と稱され明和元年十月豊竹座に書卸され三段目の切日向島は鐘太夫が語つてゐます。この床本は『大佛殿萬代石礎』の花菱屋より日向島を第三段として書かれたもので全五段ものであります。この三段目だけのこり歌舞伎にも移入されました。近松門左衛門の『出世景清』の影響を享けてゐます。その後天保二年五月角の芝居にて竹本組太夫が語つたときは歌舞伎芝居との合同興行にて三世中村歌右衛門島の景清の役を首振

にて勤めたこのころで番附面の歌右衛門口上の一節に「此度操り方衆中と打交にて組太夫殿を以て首振り操にて私相勤申候云云」と御座ゐます。この淨瑠璃の内容を申上ります。大磯粧坂手越の宿の遊女屋花菱屋の長の許へ口入左次太夫に連れられて身賣に來た二七あまりの乙女がりました。聞けば母には死別れ盲目の父は遠い日向島に非人暮し、この父を官に上せて孝養をつくりたい爲に金子入用とのこと、長は同情して金子を與へ佐次太夫をつけて日向島へ發足させます。乙女は景清の娘糸竹であります。景清は東大寺の大佛供養に入り込んで平家一門の爲に頼朝に一太刀報ひんさしました。重忠に裏をかゝれて果さず頼朝の仁心

日向島の段

に感じ我ご我が兩眼をくり抜いて日向島へ下りましたが娘の糸竹がばるばると尋ねて来てもかたくな景清は父子の名乗もせず人知れず瘧丸の蜜刀を渡して鎌倉へ追ひ歸しました。跡に娘が身を賣つて父を官に登せやうと置いて行つた金子を見ては流石に感涙にむせんで船を呼び戻さうとしました。が船の影は見えず景清のすれた心も漸く和ぎます。放埒な振舞をつくした平家も三寶に見捨てられて亡びるのは當然でありました。景清は遂に頼朝に對する敵意を飄然と改めて迎ひの島山重忠と共に鎌倉へ歸るさいふのがこの曲の梗概で御座えます。この淨瑠璃は紋下津大夫が數ある得意ものゝ中でも最もゆるしである名曲中の名曲であります。

いちご持つまいみめのよい娘、うらの島道になる、しやうかへ、ゆふべしたのは廣いさおしやる、廣かせばめよ縹子の帯、しやうかへ、茶摘小唄のなまりさへ、日向の國の花香ある、来て宮崎の浦さびて、峯の松風荒磯に、鳴子をおのが友千鳥、梅さ櫻さ月さ日の、外は都に似もやらず、爰にも住めば住みなれて、世渡る賤の春仕事、茶園に辛苦を摘みける、中のよい同士さよき合ひ、今日の晝餉遅いじやないか、なべは何して居る事さ、ぶつゝく向ふの畦道を、ひろげかあじか携へて、そりやこそ見えたさ氣もいそぐ、待つ胸先もひろさがり、金三か母こらへ

性なし、植松の姉らる作のか、や、つい爰へ見えたお鍋が、なぜやら來ぬわよ、チ、けふは内の志しの目じやはな、めくら小屋へ報捨持つてかな帯しめて待ちやれじやおじやらぬ一昨日もあの盲目で、ぼた餅二つへつられた、乞食盲目め、おれが喉じめ食がたき、昔は平家の侍、悪七兵衛景清さやらいふた奴じやげな、今では宮崎中も持てあまして、ほつと悪七兵衛、親のかたきさ食物の恨み死んでも忘れぬさ、ぶつゝく所へ小屋から走つてお鍋が聲、チ、空腹かろ待遠かる、休み時いさ皆ござれさ打つれ家路に入りにけり、松門獨り閉ちて年月を送り、自ら清光を見ざれば、時の移るをもわかまへず、暗々たる庵室に、徒らに眠り、衣寒暖

にあたへざれば、肌はげうこつこ衰へたり、春や昔の春ならん、故郷の空はいづくぞや、うき事茂る草の糸芽ぐむを撫て春ぞと思ひ、汐しむ風に秋を知り、つれなき月日のみにつもり来る、昨日は北山に名玉を得、今日は南山に足切られし、憂世は十和むたま／＼も、なぐさむ事の有ればこそ、牛飼樵夫賤の女の情の食に命をつなぎ、物たべのうこ叫ばぬばかり、さりながら盲目乞食の、悪七兵衛景清と、昔の我が名を我が心に思ふも苦るし足なみや、枯木の杖によろ／＼こよるぼひ巖にたざり寄り首にかけたる袋を開き取出せば、錦の包みにうや／＼しく、いつきの位牌、押戴き／＼石上に据え備へ、合掌頭を地につけて、南無小松の内大

臣、平の朝臣重盛淨連大居士そくし
よう菩提、唱ふる聲もかきくれて、消え入るばかりの悲漢の涙、天晴君は三世を見ぬく日本の賢人、國家の棟梁御一門の北辰、治承の空に雲隠れ玉ひしより、源平數ヶ度の戦ひ、闇に喰蛆の山坂を越ゆる如く、謀る事なす事賸づき、斯く申す景清を始め、難波越中武藏の有國、河内判官宗清なんど、一騎當千の者共、何そなく心憶し、雑兵の手に落命し、御一門こま／＼く、終に赤間むせきこめても、返へらぬ昔物語、草葉のかげより見玉は、嘸悲しうも無念にもおぼすらん、よし人は兎もあれ景清一人生きながらへ、賴朝が首取つて、討たれたる人々の教養、尊憤を散ぜんと思ひし一念の、通らぬのみ

か乞食盲目の生恥さらし、業に業をばたいても、死なんぞ思ふ一心の極まらぬば、よつく魔利支尊天の冥感にも、盡き果てたるか口惜しやま、身を掻きつめり拳を握り、落涙五臟を絞りしが、ハ、ハア、不覺の繰言今日は御命日、先年祠堂金に渡されし三千兩の功德、唐土經山寺にては御追善さぞ取り取り、今日日本にて君が爲め、花一本水一滴、供養仕る者もなくなり果てし、せめて景清生残つたる身の本懐、且は御目見えの爲めと存すれ共、庵の内は臣が不淨の伏所、恐れを存じ、石を七寶の佛壇と觀じ、位牌を出し此飯を靈供に備へ奉る、此食香味、上供一切佛昔の饗の膳、七五三五々三とも受けさせ玉へ、そば言ひながらいかに

世に住わびることも、手づから煮炊調
味して、捧ぐる程のたよりもなく、
匹夫匹婦のかまごを分けし柄の飯、
木の葉の折敷萩の折箸、これが十善
萬乗の主、安徳天皇のおち君、内大
臣重盛公の靈供か、大政大臣清盛公
の侍、大將、悪七兵衛景清が、備ふ
る膳かまごばかりにて、大地にどうこ
身を投げ伏し、聞く人なければ聲を
あげ、前後も知らず泣き居たる、世
の盛衰そ力なき、たれが哀れと訪ふ
人も、こころの拍子船つなぐ聲、ス
ハ人こそぞ御骨を、なくなく袋に入
れ奉り、探りさし足あたまふたご、
庵へ隠れ入らんさす、影を見付けて
おいしく物問はんさ、娘をいたはり
左次太夫、いそぎ船より駈上れば、
娘は小石を踏みくじらし、つまづき

よろめき走り寄り、これ乞食どの、
この島に平家の侍、悪七兵衛景清様
の、盲目に成つてましますよし、東
國方より遙々、行衛を尋ね参りし
者、有家を知らば教へたも頼むぞ
やいのさ有りければ、思ひかけなく
コハいかにさ、ぎよつこせしむ色に
も出さず、此島にさる人ありさば聞
及べど、我もても盲目なれば、つひ
に見もせず、今少し先で問ひ玉へこ
詞すくなに入らんさす、のうその詞
の五音でいたらく、聞及びしに少し
も違はず、疑ひもなく御身は父御よ
二つの時に生別れし娘の糸瀧、これ
まで尋ね参りたり、名乗つて下され
父御前と縋り付けば飛びしさり、杖
を小楯に聲荒らげ、めくらの打つ杖
咎めはなし、近寄つて娘たゝかるゝ

な、景清でないぞ、親でないぞ、當
所始めてなら知らぬも道理、日向一
國の習ひ、貧福貴賤の差別なく、兩
眼盲いぬれば此島へ捨てられ、乞食
となり、此世で因果の業を果たし、
未來佛果を祈る故、我等如きの盲目
何十人といふ數も限らず、人の上
も身の上にも、知らずと言ひしは偽
りよ、爰よりおくにさまよいしが、
誠は去年餓え死し土になりしと知ら
ざるか、我と我身の偽りも、親子
火宅の輪廻を切り、けんによもなげ
に入にける、娘はされ共逢ひ見んの
心たよりも樂しみも、精も力も弱り
果て、それは誠が悲しや、その儘
そこに伏しまるび、もたえ焦れて歎
きける、左次も涙にかきくれないから
吉野初瀬の櫻も、不斷咲いてあると

思ふは不覺、咲くからは散る筈、生れるからは死ぬる筈、生者必衰のこまはりよ、釋迦達磨ものがれ玉はず四百餘里の海陸をしのぎ、逢はんと思ひかためたる初一念、骨になりとも詞を交はさんと思はずか、道理ながら歎くは愚痴、いざその人の亡きあこを、尋ねて見ばやなたへこ、肩に引かけ行く力も、甲斐も渚の小夜千鳥、ないて、おくへこ尋ね行く折ふし里人二人れ、すり違ふて行き過る、こ左次大夫、卒爾なから物問はん、悪七兵衛景清の景期のあこはいづくの程、教へてたべこありければ、ハ、ハ、ハ、いや早粗想て、これに上越す粗想もなし、かうお出の道に物古りたる藁家に、盲目の乞食は無かりしか、その盲目に尋ねてこそ

景清死去と聞てそる、それこそ景清盲目なれ、ム、聞こえた、こなへを憐り名乗らぬ筈、幸ひ我等參る者、引合はせて參らせんこ、聞をたよりにいそぐと、元の所に立歸る、のうく景清お出ぞい、悪七兵衛やおはする、物申さんご呼ばはれば、かしましく、古巢に捨てし雛鶴の、親はなれれごこや出して、千里をかり尋ね来て、父よこなげご身を恥ぢて、我は答へす夜の鶴、腸を斷つごは人知らじ、今はこの世になきものこ、思ひ切つたる乞食を、悪七兵衛景清と、呼べばこれにこ答ふべきか、其上住家もこの國の、日向ごは日に向ふ、向ひたる名をば呼びもせで、情なく捨てし梓弓、引けば引かる、悪心を、又起さすか腹立やと、

隔ての菅弧引ちぎり、杖おつ取つて立出でしが、こころに住みなむら、御扶持ある方々に、憎まれ申すものならば、ひこへに盲目の杖を失ふに似たるべし、不具なる身の癖として腹あしくよしなき云ひ事只ゆるしおはしませ、娘はそれぞ聞くからにのうなつかしや御身が父上様かいの乳母が臨終の物語、御有家を聞くご疾し遅しと、はるん、尋ね來りに娘よう來か不便やと、一こ口いふたら科に成らうか、最前はなご胴慾につみ隠させ玉ひしと、續り付いて泣きければ、父も引寄せ撫さすり、もしやご我子の顔見たげに、指で背を引張つても、くらきに迷ふ盲目の心のやみにかきくれて、前後もわかず見えけるが、我れ熱田の大宮司の

娘に契り汝をまうく、憎くしわるし
 でなく、女なれば足手まこひこ、二
 才の時乳母が娘に呉れたれば、今で
 は子でなし親でなし、娘ありさは思
 はざりしに、血筋ほどある志、親
 は子に迷はれど、子は親に迷ふたな
 あ、禮は言はぬ出かしをつた、不便
 や乳母めもてこれしか、孤兒の年端
 も行かす、誰を力に何ぞか暮らす、
 聞かせて呉れさありければ、あいさ
 は言へと言ひ兼ねて、わつと泣入る
 ばかりなり、左次大夫目をしばた、
 き、我等御息女の御供し、共に御有
 家を尋ねし、左次大夫ぞ申す者、御
 物語り申さん、昔の御自分ならば、
 公家高家の歴々にも御縁組、それは
 今申して詮ない事、時々の花を折さ
 いふ世のたごへ、日かげの景清の娘

御、押咄れて嫁にはよぶ人も遠慮、
 あちらこちら致す内、幸ひの縁あつ
 て、即ち我等仲人仕り、相模の國
 で田地持ちの大百姓へ、氏系圖を土
 産にして、去冬婚禮さらり相濟み
 村中の參會にも、二番さ下らぬ座並
 案じさつしやりますな、不自由な事
 も何もござらぬ、其許の身の上、聲
 殿の親御が聞及び、裏の隠居所建て
 呼寄せて養はせまするも、いさ安け
 れど、天下の恐れ、氣の毒なこつち
 や、盲人のさぞ便りなからう、官を
 させましお身を安うして上げましや
 金持たせて人やるも合點なれど、孝
 行にも成らうお顔見がてら、嫁直き
 に持つて行きやと、何から何まで氣
 が付いて、あんまり心か付き過ぎて
 傍からも涙が流れますと、さし出す

財布と文箱と、胸の内さばしらぬひ
 の、心づくしぞ哀れなる、景清面色
 筋をあらうげ、ヤア左次大夫さやら
 長の海陸いつかい世話、連れて来て
 逢はせた一旦の禮はいふ、人賣りめ
 盗め、景清も、娘土百姓の島かち
 り、土龍の女房には仲人した、稚く
 さも女郎、父を見よ、頼朝に従へば
 國郡の主となり、活計觀樂をふり捨
 此の島のうづ虫めらが、五器の分け
 をすゝるも、弓矢取る身の我さいふ
 もの、男も女も義は同じ、食物に盡
 きたらば、何故のたつて死ばらぬ、
 此金で官せよと、親まで土くらひ
 の名を汚せか、エーにくい奴、打ち
 殺さうか、踏殺さうか、夫れも腕よ
 ごし足けかれ、よい／＼自滅のよい
 物呉れんぞ、探り寄つて庵の中より

瓢丸の名劍取り出し、むぼと投付け
景清が鎧ぬ勇士の心は此太刀、我手
にかゝるゝ観念せよ、立て、歸れ、
左次連れて行け、心に任する身なら
ば、たつた一と目白眼んで呉れない
と、見張る眼にばら／＼と、こぼる
涙をおさな氣に、誠の叱りさ悲し
さ辛らさ、せき上げ／＼泣きければ
里人を初め左次太夫、あまに心を殘
させぬ、詞の邪見と心の慈悲、顔と
氣色に見て取れども、わけては言は
れずさし俯むき、俱に涙にくれける
が、はつちやこばし、長居せばまた
此上に恐ろしや／＼、サア娘御船に
乗せて歸りましょ、蹴ちらす程いら
ぬ此金、殘し置くは國土の費へと、
拾ひ集め里人に、目までで渡せば目
まで受取り、チ、よい合點、早う

船に乗らしませ、まだ船に乗らぬか
ほへるか、女郎め只一と打ちにぶち
殺さんよ、杖ふり上るを、左次が乗
せますよ、娘の手を取り引立て／＼
涙を呑んで立出る、打ち殺さるゝと
父の顔、此世の見納めしげらくのう
と、焦れ歎くもいた／＼しく、弱る
心の父は猶、杖さば／＼こよるめく
姿、それ打殺しにやれ来るはと、お
ごしつ賺しつ袖を引立て手を引立て
抱き乗すれば船人は、纜解いては
せ出す、船よりは扇をあげ、陸には
聲の立つ限り、今叱りしは皆偽り、
人に憎まれ笑はれず、夫婦仲よう長
生せよ、與へし太刀を父と思ひ、肌
身も放さず回向せよ、重ねて逢ふは
冠途で／＼、さらば／＼こいふ聲も
涙にくもる汐ぐもり、追手の風も心

なく、親を殘して沖津浪、船は遙か
に行き過ぎぬ、里人立寄り互ひの御
心中察しやる、七珍萬寶多しといへ
ども、子にまさつたる寶もなし、殘
し置かれし財布と文箱、受取り玉へ
ささし出せば、さては、金を殘し置
いたるるか、文箱とは何やらん、御
苦勞ながら開いて見てたべ、心得封
をきり／＼と、上包みときほごき、
ヤア書き置きと書てあるとは、何の
書置、早う聞かせて下されと、心そ
いろに氣を苛つ、なに／＼、ひなの
御住居、それさへ有るに兩眼まで、
盲いさせ玉ふと聞き參らせ候故、あ
まり悲しさをやる方なく、官を上げ御
一生を安々暮らさせ申さん爲め、我
身を手越の遊君に賣しろなし參らせ
候、やれその子は賣るまじ、左次太

夫どの娘やい、おい船よ、のうく返へせ戻せと聲を上げ、心亂るゝ足弱車、たどり廻れば、ア、これく近ごろ便なき事ながら、船は遙かに帆影も見えず、思ひあきらめ玉へといさば、はつと砂に伏し横たはり、涙干濁の荒磯に、汐の満ち来る如くにて、身も浮くばかり歎きしが、普代相恩の主君ながら、入道殿の邪見放逸、佛神三寶に捨られ奉り、亡びし平家の運命とは知らずして、仁義正しく道を守る頼朝に敵せんぞ、生き甲斐なき命をながらへ、勇者の義を磨くくと思ひしは、皆天道に背く悪人の方人、兎に角弓取りは、死すべき時に死なざれば、死にまさる恥ありとて、今景清が身に知られたり、積悪の餘殃我子にめぐり報ひ來

て、君傾城に身を落せし、娘が身の油の價にて、老の命をつながん事、直に肉を食ふ同前、孝行却つて不孝の第一、但しは人外畜類になれこの所爲か、泥水をすり、土砂を喰らへばとて、これで官が成るものか、うらめしの黄金やと、大地にがはご投付け打ち付け、苦しみは肝に焼鐵さす、見えぬ眼玉の飛び出るばかり押ぬぐひ押しすり、大聲上げて泣きくどく、道理せめて哀れなり、折よしと里人近く立ち寄つて、少しき恥をにくむ者は、大功なす事能はずといへり、かばかり、善悪をかみ分けし景清など、志を改め、頼朝に歸伏せんと思召さすや、さもあらば息女の身も汚さず、鎌倉殿にもさぞ御喜悦、良食は木を撰んで住み、忠臣は

主を撰んで仕ふ、こいふ萬世の格言を思ひ當り玉はずやとありければ、耳をそばだて、今までは賤しき士民こそは思ひしに、かゝる道理を述べ玉ふ、おこは誰、チ、不審尤、かく申すは天野の四郎、土屋郡内、鎌倉よりの隠し目附、御邊に附添ひ起伏立居、其日をもつて鎌倉へ告げ知らせずといふ事なしと、懐中より取出す家形紋の錦の胸服、右大將家の御紋の光り、あたりを拂つて見えにけり、ア、恥しや、歎きに本心を、見咎められし此上は、只兎も角も我が引詰めし梓弓、やたけ心の弱るを見て、天野の四郎磯邊に立出、悪七兵衛景清、志を改め、頼朝公に御味方、上洛の御船参れと呼ばればさり／＼伴ふ、渡海作りの召の船、

浦風に吹きさらさせ、早や押し出す
 掉の歌、四海浪風靜かにて、枝もな
 さらぬのんまいく、玉の小柳もま
 れてよれて、たごるもんごる、なび
 きをさまる八島のまいよ、ほんほ、
 ほ、ほんく外まで君が代の、恵み
 の海に情けの船、詞のしほに心のみ
 ちひ、敵と味方は追手追風向ふ風、
 千里一と飛び一と走り、一つ涙を昔
 と今に、こぼし分けたる女涙と男涙
 動かぬ義心のかな、碇も引かる、輪
 回も親子の継、長き世かけてもしほ
 草、筆のすさみと成りにけり。

河内平野を快走する

大 鐵 電 車

風薫る初夏の

長野遊園地へ

清々しい沿線の風光

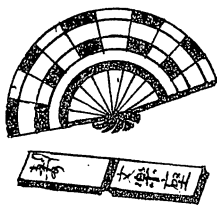
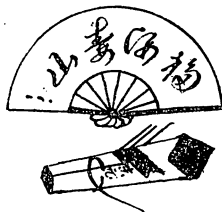
各種扇問屋

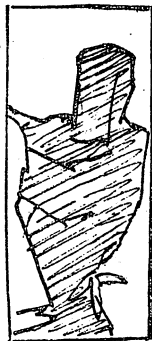
戸田商店

大阪市南區道頓堀

下大和橋

電話南六九二番





戀女房染分手綱

道中双六の段

重の井子別の段

道中双六の段

レ	ツ	レ	ツ
鶴野鶴豊鶴鶴竹豊野竹	鶴竹	鶴竹	豊竹
澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤	澤澤	澤澤	澤澤
道金新福團團勝勝	道道	道道	道道
二清友小太二伊三	道道	道道	道道
郎彌若助駒庄郎郎三郎	道道	道道	道道
			六

この淨瑠璃は寶曆元年二月竹本座に掛けられたのち始めて全十三段から成立つてゐます。この段は十段目で双六の段であるが重の井子別れで通つてゐます。作者は吉田冠子、三好松洛であります。この曲は大近松の「待夜小室節(丹波與作)」を改作したものであります。書下しの時は竹本大隅椽が語つてゐます。この子別れの段の趣向は丹波の藩主由留木家の家老伊達與三兵衛の忝與作が竹村定之進の娘重の井と通じて與之助といふ子供を生けたが、悪者の讒言で故國を走り、馬追に零落します。重の井は再び主家へ歸參が叶ひ、乳人

となつて姫君のお供で江戸へ發足しやうとして、姫君のお遊びにこ呼入れた馬士が意外にも一子の與之助であつたので、一旦は親子の名乗をしたが、世間體を恥ぢて、涙を隠して袂を別つさいふ筋であります、歌舞伎にも上演されて有名なものです。

道中双六の段

立年月も追り來て由留木殿のお湯殿子調の姫早十二歳に成賜へば兼ての約束にて東の高家入間殿へ御婚禮極り齋から取る花嫁御けふ旅立の御供揃へ上下ざいめき賑はへり。刻限は己の上刻この定めにて御迎ひのおも家老本田彌三左衛門數獻の盃足もこはよるくこ猩々緋の道中羽織白い所は髪斗りきんかあたまに顔色もしゆちんの立付けりしげに何

重の井子別れの段

切竹本 土佐太夫

野澤 吉兵衛

人形

- 一、調 姫 桐竹紋司
- 一、乳母重の井 吉田文五郎
- 一、本田彌三左衛門 吉田玉松
- 一、馬方三吉 吉田市松
- 一、腰元お福 吉田文作
- 一、おどり子 吉田兵次
- 一、おどり子 吉田榮三郎
- 一、幸 領 吉田玉市
- 一、幸 領 吉田光之助

さくお供廻りも揃つたらお先手から乗出し召れ目度折からご申し殊に女中のお供だ、少しの事は見過しにして置召され、あつこたへてさいりやう共サア御立さ催す所に奥より女中聲々にマ、待つしやれく氣の毒やお姫様關東へいく事はいやじやくこやんちや斗り御意なされお發様も殿様もたらしつしかつ遊ばさ共ごふでもいやじやさおむつかりお乳の人の重の井殿色々申されても夫程江戸へいきたくば乳母斗りつきおれさお乳の人の脊中をさんくさぶたしやんして御機嫌おそれましたさいふさころへ眉泣ばお姫君は江戸も東もこちやいやおれはいかぬ泣くく走り出で賜へば武士衆も下々も御門にかけ出で家老の

外男ぎれこそなかりけれ、お乳の人数をかコレ申お姫様下々の子供さへ九ツ十では物のきわけござります、江戸へござれば入る間殿の惣領様御さかしづかれるお身ぢやぞお乳の育ての難になれば女でこそあれ乳母は腹を切らねばならぬサアいお子じやお興にめせさおごしてもそやしてもいやく皆のたましぢやなんの東もよい所こしも共かうたふを聞きやサアみんな爰へ出ていつもの歌をうたへくせめ賜へばおさぎ小性のぐわんぜなし十二三なむ手をそろへ山も見へさるかりそめに江戸三界へいかんしていつ戻らんす事じややら殺して置いていかんせのはなちはやらじ泣きければアおきやくお大名の宮仕へ琴の組でも諷は

いで誰に習ふて端手な歌姫君などに
 おしやんな必ず置いて貰ふとお乳の
 人のふ機嫌さ本田もあまり詮方なく
 申お姫様あれは人の口てんがぶ花の
 お江戸は京まさり淺草上野の花盛り
 又さかい町木挽町でんつくくで
 この坊ゑいやつこさゝゑいなごも切
 合を見せましよふ道中の面白い事富
 士の山と申す天迄さゆく山を御目に
 かけまする先年身共御結納の御使
 者に參つた時はお姫様はまだ二つ何
 卒御婚禮のお迎ひに參りたいと申た
 が光陰矢の如しと今年丁度十一年其
 様にやんちやおつしやるまで長生を
 致さそこは存ぜんんだ、早ふお典に
 召せませいさ力一ばいすかしてもい
 やく江戸へはいきばせぬごうでも
 いやじやと泣賜へばお乳も今はあぐ

みはてごふしてよからふ御家老もあ
 きてこそはいれければお中居の若
 菜は門外より走り入りナ、お乳の人
 様おもしろい事がござります十ナ斗
 りのそりさげのちつほけな馬方が道
 中双六さやら東海道の繪をひろげあ
 ぢな事して遊びます御機嫌直しにお
 目にかげなされませテ、よふぞ氣が
 付た夫は聞き及んだ道中の繪を見せ
 ましお心もうつる爲馬士でも子供は
 大事なにお赦しちや其丁稚に持て參
 れさよふでおじや心得ましたと御門
 に出連立來る馬方が片肌ぬいでさば
 き髪御前近くも不遠慮に椽先に揚足
 してヤレくくあか様達はあつた
 ぼこしゆもないほふばい共さかけご
 くに道中双六打つてくつの錢程しこ
 こませうと思ふたに人呼追つて何で

やる、ハレヤレくくきつく乗つ
 しやれ馬やういごぞつかふごなる扱
 てりかうな野良じやな船頭馬かたお
 乳の人こちもそちらと同じ事シテ年
 はいくつ名は何さいふぞ年は今年十
 一五つの年から馬おふて一代若衆に
 成らずにはへぬきの念者じや所で名
 はじねんじよの三吉さてもよい名じ
 や聞けば道中双六が有るげな腰元衆
 も打て見や姫様も遊ばせサア三吉も
 爰へこい苦しうないと呼ければあい
 さいふより慮外をも返り短かきさせ
 るの煙立まじりたる女中の傍そぐば
 ぬ様に見へざるはさすが童の一徳さ
 繪を取出し双六をみな打交り遊ばる
 くこれく御らんせうたしやんせ是
 こそ五十三次を居ながらあゆむいざ
 膝栗毛馬はいしい道中すこ六なむ諸

佛ふんしんを書いた六字を六角のさいば櫻木花のみやこをまん中に思ひくゝの印を置いてさらばこちらから打出の濱大津へ三里爰でやばせの船賃が舟召せくたび人の乗おくれにさい草津お姫様より先づ姥が一ト口ニタロみな口ごちやう喃りこゑ坂へこすのさい次第さいをふれく振るやすいがを後にさかればまけまいとせきにせきより龜山にたげ火うち石やくしおつこくは名の舟渡し所々の名物がふておあしつくく突手まり子にひいふう三いよふ府中杖尻にすつこんくこんさ打つたる沖津波松原暗る膏薬かふて月をすひ出せきよみ寺由井蒲原や吉原の花の蒲焼名物の鰻の肌へ沼波の宿三嶋こゆれば箱根へ三里さいめしだ

い關こゆ、悪いめうでは手はんを取りに元へ立歸るがつてんかチのみにんだ小田原うらふ大磯平塚藤のさはともなしに双六のさいさきもよし門出よし道中早めてごつかはさいそぐ程か谷神奈川越エ川崎を越エ品川こへまつ先かげのお姫様一ばんがちに勝つ色の花のお江戸につき賜ふ一のうらば双六の幸有り悦び有りなぐさみ有ける道中ごどつと興にぞ入賜ふ。

床本 重の井子別れの段は

M 傍の衆にはやさされて、稚心の姫君。かうおもしろい東さば、今迄おれば知らなんだ、サアく行かう早やいかう。ヤアござらうさおつしやるか、そりやめでたいわく、又もや御意の變らぬ間に、行列揃へこ

立ちさばぐ。お乳の人は勇みをなしそんならま一度、大殿様お袋様さお別盃、これも馬子殿おかげじや、でかいたく、そちには禮いふ、褒美やる、そこに待ちや、こさいめき渡り、奥にお供し入にけり。馬士はつひに見ぬ金の間をうそうそ、覗き廻れご薙の外、踏もならばぬ備後表詞エ、此座敷はぎやうにすべつて歩かれぬ、大名の家よりも、こつちの内かけつこでござる、ご獨言して居たりけり、お乳の人は大高に、菓子さまん、文庫にもり入れ。詞どれどれ三吉、そこにかそちは健氣者じや道中双六お目につけ、それ故に姫君様、お江戸へござるご御意なさる、お上にも御機嫌、是は御前のお菓子有難ういたゞきや、お錢三筋、買い

たい物買ひや、殊にそちは通じやげな、道中すらも用あらば、お乳の人の重の井に逢はふ云や、見れば見るほごい子ざやに、馬士させる親の身は、よくくであらうといふ懇の詞のすゑ。三吉つくく聞きすまし。詞由留木殿の御内お乳の人の重の井様はお前か、そんなりやおれが母様ご、抱き付けば。ア、こは慮外な、詞齊も様ごは馬士の子は持たぬ、そもぎ放げ、武者ぶり付き引退くれば縋り付き、詞何んのない事申ませう。わし、お前昔の連合、此御家中にて番頭伊達の與作、其の子は私、こな様の腹から出た、與之助はわしじやわいの父様は殿様のお氣にちかふて、國をお出でなされたは、小さい時で覺

えれど、沓掛の乳母が話には、詞は、様も離別さつらで、殿様に御奉公、こなたは乳母が養育し、父さんに逢はせたら思へ共、甲斐もない、母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、重の井さまご尋れよと懇にをしへて、乳母はおれが五つの年、久しう痰を患ふて、鳥羽の祭の餅が咽につまつたやら、つひ死んでのけました、詞、乳母が子の一平は父様を尋れに行き、在所の家を養ふて、漸々馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする、コレ守袋を見やしやんせ、何んの嘘を言ひませう、お前の子に紛れない、外の望みは何にもない、父様を尋れ出し、なりとも三人一所に居て下され見事、も打ちまする、此草鞋も

わし、作つた、晝は馬を追ふて、夜は沓打、草鞋、つくり、父様母様養ひませう、父様ご一に居て下され、拜みまする母様ご、取つき抱きつき泣き居たり。お乳ははつご氣も亂れ見れば見る程我子の與之助、守り袋も覺えあり飛び付いて懐に抱き入れたく氣はせれども、アツア大事の御奉公、養ひ君のお名の蓮、偽ばつて阿らふか、イヤ可愛げにさうもなるまい、マアちよつご抱きたい、ア、いごせうご百千色の憂涙、二つの目にはたもちかれ、むせび沈みて居たりしが、いやいや我子ながらもさかしい者、偽つても眞とせず、母を心のきたない者ご蔑しまるも情なし、譚を語つて合點させ耽しめてかへさんものご、涙拭ふて氣をしづめ

爰へ來い與の助さ引寄せて、兩手を
取り、詞扱も大きいなりやつたの、
さても成人せうならば、侍らしう
なせ尋常にも育てぬぞ、顔の道具手
足まで、母はかうは産み付けぬ、美
しい黒髪を此やうに剃りさげて、手
足は山のこけ猿じや、ほんに氏より
育ちぞこ、又さめんゝ泣きけるが
詞コレ物をよう合點しや、腹から産
んだば産んだれども今では子でも母
でもない、淺ましう成下つたを、嫌
ふていふではさら／＼ない、爰の譯
をよう聞きや、詞母はもと御前様の
御奉公人、與作殿は奥家老の御子息
たがひに苦木の戀風に、すれつもつ
れつ、一夜が二夜さ度重なり、そな
たを懐胎此の事御上へ聞へては、父
も母も御成敗にあふ故に、詞病氣さ

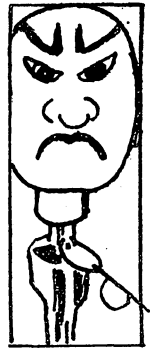
偽り乳母が所で産落し、育て貰ふ其
中に、情なや八平次といふ者の所爲
にて父様は御追放、此母が倍氣から
不義の事あらはれ既に御成敗に極り
しを、わしが爲には父様、そなたの
爲には祖父様の定の進様、勿體ない
わしにかはつての御切腹、お姫様の
乳ばなれさいひ立て奥家老の御子息
二番さ下座にさがらぬ人、其時母も
一所に退けば、もつこも夫婦の道は
立てども、目に餘つたお家の御恩、
誰何時の世に報ぜん、残つて恩を報
じてくれさ、父様の斷り故、第一は
男のため、夫婦の義理を忠義にかへ
て、飽かぬ離別をしたわいの、詞男
の子は幼うても、御勘氣の末氣つか
ひな、與作が子さばしいはしやくな
サア早う御門へ出や、いかなる因果

な生れ性、現在我子に馬追させ、男
の行衛も知らぬ身が、母は衣裳を着
飾つて、お乳の人よお局よ、玉の輿
に乗つたさて、是か何になること、
聲を忍びて泣くばかり、子は生れつ
き賢くて、聞きわけある程猶泣入り
悲しい話を聞きました、さりながら
常に乳母が申したば、乳兄妹の事な
れば、母様にさへ逢ふたらば、父様
も出世なさるゝ由、御訴訟なされて
くだされかしこ、いへばちやつと口
をおさへ。アレ／＼勿體ない、詞其
乳兄妹は言はぬ事、姫君様の關東へ
養子嫁子にお下り、高いもひくいも
姫ごぜは大事の物、先は他人の世間
體、三吉さいふ馬追が、乳兄妹に有
るなごこ、どう妨けにならうやら、
蟻の穴から堤も崩る、輕いやうでも

重^{おも}い事^{こと}、もそ〜いふて人も聞^きく、
 先^まづ早^{はや}う出^でてくれよ、泣^なく〜いへ
 ば三^{さん}吉^{きち}。詞^{ことば}ア、母^{はは}様^{さま}あんまり遠^{えん}慮^{りょ}過^か
 ぎました、先^まづ言^まふて見^みて下^{くだ}され。
 また言^ひをるか聞^き分^わない、夫^{あつと}の事^{こと}我^{われ}子^こ
 の事^{こと}、母^{はは}に如^{ごと}才^{さい}があるものか、合^あ點^{てん}
 のわりの聞^き分^わけなご、制^{せい}する中^{ちゆう}に奥^{おく}
 よりも、詞^{ことば}お乳^{ちゆう}の人^{ひと}ごにぞ、御^ご前^{ぜん}
 から召^めしますと呼^よばれば、アレ聞^き
 きや、人^{ひと}がくる出^でてたもご、手^てを取^と
 つて引^ひ出^だす。不^ふ憫^{びん}や三^{さん}吉^{きち}しく〜
 涙^{なみだ}頬^ほ冠^{かん}りして目^めをかくし、沓^{くつ}見^みまつ
 べて腰^{こし}につけ、見^みすばらしげな後^{あと}影^{かげ}
 コリヤま一度^{いちど}こちらむきや、山^{やま}川^{がわ}で
 怪^け我^がしやんな、雨^{あめ}風^{かぜ}雪^{ゆき}ふり夜^よ道^{みち}には
 腹^{はら}が痛^{いた}いご作^{さく}病^{びょう}おこし、二^か日^{にち}も三^か日^{にち}
 も休^{やす}んで、煩^{わづ}らにぬ様^{よう}にしてたも、
 毒^{どく}な物^{もの}くはずに腹^{はら}癩^{しか}疹^{じん}の用^{もち}心^{しん}しや、

可^か愛^{あい}の形^{かたち}やいた〜しや、千^{せん}三^{さん}百^{ひゃく}石^{いし}
 の代^{しろ}取^とり、何^{なん}の罰^{ばつ}を咎^{とが}めぞご、式^{しき}臺^{たい}
 の段^{だん}階^{かい}子^しに身^みを投^なげ伏^ふして歎^{なげ}きしが
 懷^か中^{ちゆう}の有^あ合^あふ一^{いっ}步^{ぱう}十三^{じゅうさん}、巾^{きん}沙^さに包^{つつ}み
 是^これ嗜^しみに持^もつて居^ゐやご、涙^{なみだ}ながらに
 渡^{わた}さる。三^{さん}吉^{きち}見^みかへり恨^{うら}めしげに
 母^{はは}でも子^こでもないならば病^{びょう}うご死^しな
 らご要^よらぬお構^{かま}ひ、其^{その}一^{いっ}步^{ぱう}もいらぬ
 馬^{うま}士^しこそすれ伊^い達^{だつ}の興^{きよう}作^{さく}が惣^{そう}領^{りやう}じや
 母^{はは}でもない、他^た人^{にん}に金^{かね}貰^{もら}ふ答^{こた}がない
 エ、脩^{しゆう}慈^じな母^{はは}様^{さま}覺^{おぼ}えて居^ゐさつしやれ
 ご、わつご泣^なき出^だす其^{その}有^あ様^{よう}、母^{はは}は魂^{たま}
 消^きえいりて。養^{やしな}君^{きみ}、お家^{いえ}の御^ご恩^{おん}思^しは
 ずば、さて一人^{ひとり}子^ごを手^て放^{はな}して何^{なん}のや
 らうぞ、奉^{ほう}公^{こう}の身^みの淺^あまじやごも
 だえ焦^{あせ}れて歎^{なげ}きける。時^{とき}に奥^{おく}口^{くち}ざや
 めいて、早^{はや}御^ご立^{たち}ご姫^{ひめ}君^{きみ}の、御^ご輿^うかき
 上^あげ行^い列^{れつ}立^{たち}ち、お乳^{ちゆう}の人の乗^{のり}物^{もの}を、

ひら付^つにこそかき寄^よせけれ、お乳^{ちゆう}は
 さあらぬ顔^{かほ}付^つして、姫^{ひめ}君^{きみ}のお伽^がに、
 最^ま前^{ぜん}の馬^{うま}士^しを此^この乗^{のり}物^{もの}に引^ひつけ、お
 慰^{なぐさ}みにうたはしや。畏^{かしま}つたご宰^{さい}領^{りやう}
 ごも。詞^{ことば}コリヤそこな、自^じ然^{ぜん}誓^{ちか}め諷^{ふう}
 ひおらうごぎごつなく、詞^{ことば}ヤアこい
 つばほへなるか、何^{なん}じやこりやいま
 握^{にぎ}拳^{こぶし}二^につ三^{さん}つ、いたゞき
 ながら泣^な聲^{こゑ}に、坂^{さか}は照^てる〜鈴^{すず}鹿^かは
 くもる、土^{つち}山^{やま}間^まの間^まの土^{つち}山^{やま}雨^{あめ}が降^ふる
 降^ふる雨^{あめ}よりも親^{おや}子^ごの涙^{なみだ}、中^{なか}にしぐる
 。



堀川猿廻しの段

切豊 竹 古靱太夫

鶴 澤 清 六

レ(豊 澤 友衛門
鶴 澤 友衛門)

人形

- 一、與次郎母 吉田玉七
- 一、弟子おつる 吉田文之助
- 一、猿廻し與次郎 吉田榮三
- 一、傾城おしゆん 吉田文五郎
- 一、井筒屋傳兵衛 吉田扇太郎

近頃河原達引

堀川の段

五三助の合作でありますか、これより先き豊竹八重太夫が天明二年道頓堀中の芝居で語つてゐます。この堀川は全曲の中の巻になつてゐます。

床本 堀川の段

『それや聞えませぬ傳兵衛さん』で有名なこの淨瑠璃はおしゆん傳兵衛の心中を主材としたもので、元文三年十一月十六日の朝京都聖護院の森に於て發見された吳服屋井筒屋傳兵衛と先斗町近江屋の抱へお俊との情死事件と、同じ頃京の公卿侍と所司代の下部とが四條顔見世芝居の歸途喧嘩及傷に及びし一件と、孝子として表彰された猿廻しの丹後屋佐七の話とを取合せ佐七を與次兵衛に作りてお俊の兄として構想したものです。天明五年五月江戸肥前座に書下され、爲川宗輔、筒川半二、奈河七

M おなじ都も世につれて、田舎の薄煙、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、合の手もつれ氣もつれを、保養がてらの薬風呂、あふぐも我を澁團扇、目さへ不自由な暮しなり詞おつる様嘸ぞ待遠にあらうなア、そしてなにやらのさらへであつた、オ！それ鳥邊山、アリヤじたい心中事、會にでも弾くのなら、お前は女の方、お繁さんは男の方、かけ合にうたふがよいぞへ、ドレ／＼お繁さんのかわりに、私ご掛合ひにうたひませう

こ、老手彈手もしほらしき 二上リウ
 タヌには白無垢や、上に紫藤の
 紋、中着緋紗綾に黒縞子の帯、年は
 十七初花の、雨にしほるゝ立姿、男
 も肌は白小袖にて、黒き縞子に色淺
 黄裏、二十一期の色盛りをば、戀こ
 いふ字に身を捨小舟、ごこへ取付く
 島さてもなし、鳥邊の山はそなたぞ
 こ、死に行く身の後髪、弾く三味線
 は祇園町、茶屋のやま衆が色酒に、
 亂れて遊ぶ騒ぎ合ひ合あの面白さを
 見る時は詞ア、イエ、それでばこ
 んぞ聲にしほれがないはいな歌あの
 面白さを見る時はこ、かう調ひなさ
 れ。アイ、あの面白さを見る時は、
 詞オットヨシ、染殿、そなたと某
 が、去年の初秋七夕の、座敷踊をか
 こつけて、忍び逢ふたる思ひ出す詞

オ、今日はマアそこ迄、精が出
 る程あつて、きつう手も廻り出した
 モウ、ごこで弾きなさつても恥か
 しい事はないぞへこ、聞いて笑顔の
 片男波、又明日さいふ汐に、お鶴は
 立つて歸りける。母を大事さ油斷な
 き、見過ぎも輕き小風呂敷、肩に乗
 せたる猿廻し、戻りはいつも日暮前
 與次郎はいきせき門口から、詞、母者
 人、今戻つたぞや、オ、兄戻りや
 つたか、嗚そひもじかる、茶も湧い
 てある、膳もそこにして置いたぞや
 オ、徳よ、今戻つたかよ、今朝から
 子猿めが親を尋てやかましい、コレ
 兄や、ちやつと傍へやつてやりやい
 の。アイ、左様でござんしよこ
 も、ソレちやつと乳を呑してやりお
 れ。イヤノウ與次郎、そなたも孝行

にしてたもるに付け、私が此長々の
 病も、いつ本服する事であらうと思
 へば、勞の上に猶勞れる、僅な弟子
 衆の餘情や、我身の勤きで、此養生
 がマ、なるものか、思へば薬も毒
 さなり、母ではなうて子供のためには
 苛責の鬼と思はるゝ、鬼は冥途にあ
 るものを、つれなの老の命や、身
 を悔みたるむせび泣き、哀にも又い
 ちらし、詞ア、コレ母者人、ソリヤ
 マア何を云はんすぞいの、其様にみ
 そやかな身代ぢやと思はしやるか、
 此間弟子入した米やの息子殿から、
 長々お袋の煩ひで、嗚かしの勝手が悪
 からうと、云ふて陽が花かこ申すや
 うな、上白米の仕送り、店々の旦那
 衆から、何なご用があるなら云ふて
 おこせ、若し出養生さしますなら、

幸な隠居所もある程に、云ふて
来るお方もあり、蒸饅頭生魚、近
所隣へ早々すそわけもしられれば、
鯛赤貝の類は、塗町の鮮屋へ卸賣、
モコレ案じる事は微塵もないぞや、
それにまだくまだ氣の毒なは、此
家主が此家を居なりに、買てくれぬ
か頼まれる、ヤレいや、のくア
、あた世話な家持よりは金持が、番
ましてあらうか、母に案じなかけ
させぬ、贅八百さへ一貫に、たらぬ
節季の事諱を、云ふ下稽古やこれな
るべし。嘘さば知れど老の身は、子
にしたがふがならひぞ、機嫌よげ
に打ちうなづき詞オ、それ聞いて落
付きましたか、落付ぬは娘が事、此間
も親方が、おしゆんを預けに來てい
はしやるには、コレ傳兵衛殿さ云ふ

客の事で、ちご内に置かれぬ事であ
る、譬へ傳兵衛が尋れてござる共、
おしゆんが歸つて居る事は、包み隠
さればならぬぞや、くれんくも云
しやつたぞや。サアわしも其入譯を
聞た故、おしゆんが心根を思はずし
らず涙か、ドレ灯を燈そご棚のすみ
こそく取出す行燈の、灯かけも洩
る、暖簾ごし詞おしゆん、コレおし
ゆん、アイご返事もしほくご、思
ひなやみし顔形、まアく爰へご小
聲になり詞門の戸はかけてある、見
る人も聞く人もない、方々で噂を聞
くに、此間の川原の喧嘩、殺し人は
サ殺し人はわが身の客の傳兵衛殿な
たご、大恩請けた久八さ云ふ者が、
代りに捕られて往つたげな、其場
に落てあつた小柄が、あの傳兵衛殿

が御座敷から、拜領した小柄ぢや故
天命遁れず御詮議最中、なれども其
夜から傳兵衛の行衛も知れず、其あ
ひ方の女郎はおしゆんさ云ふ事を、
オ上にもよう御存じて、親方の方へ
もいろくご、御詮議あれど、これ
も行衛が知れぬさ云ひ切つて、今も
めてある最中ぢや、取々の噂評
判、おりやもう聞く度毎にびくく
するさ、聞くほごせまるおしゆんが
胸、詞其夜の起りも皆私故、ごに
ごうしてござるやら、心元なき逢ひ
たさも、云ふに云はれぬ此場の品、
いかゞ胸もふさがりし、母は一途
に娘の可愛さ、詞コレくおしゆん
案じる事はないわいの、併し突詰た
男氣で、ひよつごこの家へ來て、
又物ざんまいでも仕せやまいか、

四五日ば夜の目もろくに、モ寝られぬまゝの物案じ、世間にたんごある格な、心中やなごしてくれたら、此母は目かい見えす、兄はアレあの様な臆病者、もしもの事があつたらば、跡で母はごうせうぞ、袖乞物貰ひに歩いて、そりやもう一つもいごやせぬけれどもそなたの體に凶事でもあつたら、おりやもう直ぐに死んでしまふぞや、若い氣に前後思はず、義理ぢや、イヤ人の落目を見捨てはご、詰らぬ義理を立抜いて、年寄の此母につらい目見せてたもんなやご、可愛さ餘る親心、ア、南無阿彌陀佛も涙聲、兄も俱々ヤコレおしゆん、詞今母の云はるゝ通り、何の義理もへちまもいらぬ、ごいてしまへばあかの他人ぢや、又おれも氣にか

つて、好きなものさへ咽へ通らぬわいのう、母ぢや人の氣休め、おれが腹助けぢやご思ふて、ごいてたも、ヤコレ頼むゝご正直一遍、母の心ご兄の詞、勿體ないご思へども、切るに切られぬ胸の内、所詮死なればならぬ身の、此場を抜けて其上でご、心一つに思案を極め、詞か母様、兄様お二人の、お詞よう合點いたしました殊に又傳兵衛さん、ツイ一通りで逢つた客、深い半太夫サハリ、譯でもないわいなア、併し勤のならひにて、人の落目を見捨てるを、里の恥辱さするわいな、さても末の詰らぬ事、わしや得心してをりまする、詞ちよつこ逢つて其上で憎う悪うもない様に、得心をさせまして、品よう譯の立つ様に、詞イヤゝ其様に譯立てるご云

やつても、あつちに得心せぬ時は、それゝ行がけの駄賃馬で踏殺し、アイヤゝ無理解しにせうもしれぬわいの、コリヤめつたにはかみ合されぬわいの。おゝ兄の云やる通りぢや、そなたに怪我でもあつては、傳兵衛殿さやらも難儀、思ひ切るのがあつちの爲、わが身に心引されては、つひ捕へられるはしれた事、退状をやつたらそなたの事も思切つて、オゝ切るごもゝ、遠い國でも影を隠したら、身を遁れまいものでもないわいの。コレゝゝむづかしがる共ツイ一筆、兄硯箱取つてやりや、サ、早うゝご母ご兄、詞にいなも泣顔を、隠す硯の海山ご、重る思ひのべ紙に、筆の立ごの跡ご先、涙に墨のじじみごちなる胸の内、書残すごは

露知らぬ、與次郎は傍から、詞コレ
ノコレ其様に長たらしう書すとも、
ツイごきますと書いてもすみさうな
事ぢや。イヤノウ書いたものは後々
迄も残る物、男の去状と同じ事、こ
つくりと譯の分る様に書いてやるが
よいぞや。アイ此状にまつくりと、
御合點の行様に、兄さん、此文お前
からお渡しなされて。オツトよしよ
し此状さへあれば千人力ぢや、マア
母者人も落付しやれ、さやか
云ふ内九ツ前、お前も奥でサ、いも
うれやんせ。オ、それ、今夜こ
そゆつくりと、心よう寝るであらう
兄もそなたもそこに寝やと、奥底も
なき隔てをば、拂明てこそ入にける
詞サアおしゆん、こちらも爰で往生
いたそ、アイさおしゆんが俱々に、

暫し此世をかり蒲團、薄き親子の契
りやと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と
諦めて、更け行く鐘も哀れ添ふ。頃
しも師走十五夜の、月は冴れど胸の
闇、過ぎし別の言ひかはし、死なば
一所で傳兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼ
りと、手む軒は目覺えの、體に爰と
門の戸へ、さばる相圖の咳拂ひ、聞
くにおしゆんが飛び立つ思ひ、上げ
る枕も打げつす、與次郎は傍に高射
心も俱に行燈の、灯ふき消さし足に
心急ぐ程明兼れる、戸口の繫金表に
も詞おしゆんぢやないか、傳兵衛さ
ん、よう逢ひに来て下さんしたと、
云ふ聲寝耳に與次郎が、恠り起るこ
明くる門の口、妹も姿もくら紛れ、
さらへる袖のふりあはせ、おしゆん
と心得傳兵衛を、無理に引込取違へ

戸口を内からびつしやり引立て詞そ
りやこそつれに來おつたぞ、おしゆ
ん必ず外へ出まいぞや、戸口はおれ
が押へて居る、ヤア門に居るは傳兵
衛ぢや、おのれを入れてよいものか
と、いふもがた、胸ぶるい、詞コ
レナア兄様、わしや表に居るわいな
何ぢや表に居るわいなア、ヤア其聲
色置てくれ、そんな事喰ふおれぢや
ないわい。母者人、母者人、傳兵衛
がおしゆんを殺しに來た故、今表へ
たて出した、おれ一人では手が廻ら
ぬ、こなたも加勢して下され、加勢
くくく、うろくくく、う
ろたへ騒ぎ母親も、何ぢやくくく
傳兵衛の加勢、ム、まだ外に同類で
もあるのかと、探り寄つたる傳兵衛
が傍詞コレくおしゆん、顔ふ事は

ない、兄や母が付いて居る、マア氣を鎮みやよ撫でさする、脊の手ざはり合點行かず、詞コレ〜與次郎、ごうやらこらや娘ではない様なわいのヤアくらがり紛れに材木が紛り込みやせぬかや、こなたつかまへて居て下されやよ、探る手先に火打箱、がち〜ふるふ附木の光り、詞シヤアコレヤ妹ぢやない傳兵衛じや、お袋兄御、エ、面目もない此姿よ、猶も小隅に屈み居る。コリヤヤイコリヤ其様にしほ〜として見せて、おいらを欺して、おしゆんを突うごすのか、其手はくばぬよ懐より、一通取出し、こは〜ながら傍に寄り、詞コリヤ〜傳兵衛、おしゆんよ我ミ手が切れぬよ、科人のわれじやによつて、妹迄難儀する、それでさ

つきに妹に得心さして、ごき狀を書かしてあれば、コレこれを見い、これぢやによつて、モウ〜〜おしゆんが方に殘心氣は離さてあるわいム、スリヤおしゆんが其退狀を。サアごき狀ぢや、エ、其心よは知らず云ひかはした、詞を誠と思ふて、迷ふて來たが無念なわい、口惜いさ齒を喰しげる男泣、恨を聞くも隔たる戸口、心ばさうじやないじやくり詞オ、嗚腹が立う道理ぢや〜、マア〜ごつくりさ氣を鎮めて、退狀を見て下さんせいなア、オ、それでよい、長う物いやんな屑が出るぞ屑がコリヤヤイ〜傳兵衛おれも讀んで聞かしたうてもな、皆目おればナニアノソレオ、祐筆ぢやわい、サアサア早うご封じめ切り、突付られて目

に溜る、涙を拂ひ、詞ナニ書置の事ヤア何ぢや、書置ぢや。コレ〜〜兄正直な、悔りする事はないわいの、そなたは無筆わしや言、書置ぢやご讀違へ、うろたへさして門口へ出で娘を存分にせうごのたくらみ、ハアハ、そんな嘘は喰ませぬ、サアサアほんまに讀ましやれ〜、コレコレ與次郎、表の娘に氣を付けて、門の戸を明きやんなや。オ、呑込んで居る、爰にはおれが、へ〜へばり付いて居るわい、サア〜〜早う讀みやい、ものこそよう書かれ、聞く事は祐、ヤナニ無筆ぢやないわい、サア讀だ〜。エ誠にこれ迄の御養育、海山にも譬へがたき親の御恩、殊更不自由なる御身の上、何卒首尾よう勤を遁れ、世を樂に過させ

まし候は、せめて少しの御恩報し
孝行の片はしにもなり候はんぞ、そ
れのみ朝夕祈り處、く、二世迄
こ云ひ交しり、傳兵衛様、思はぬ此
度の御身の難も、根を尋れば皆われ
故に候へば、今さら見捨て候ては、
女の道立ち申さず候、不孝は思ひ
ながら、俱に覺悟を極り。オ、母
者人、どうやら風かかばつて來た様
な。サイノウわしも胸かどきくこ
サア其跡をちやつと讀んで下され下
され。エ、俱に覺悟を極めり、先
程傳兵衛様へ退状を申して認めしは
此事申上度きま、退状を偽り書き残
しり、何事もく前世よりの定り
事と、御諦め下され候、申上げたき
數々、筆にもつくしがたく候へ共、
心せくま、申入れり。オ、くさ

てはさうした心かき驚く傳兵衛、親
子ばうろく詞エ、氣づかひな、コ
レ兄や娘の家へ、早うく母があ
せれば與次郎も、戸口明けければ走り
よる、妹を無理に四人が、顔見合し
て溜息の、涙はさらにわかちなく、
何と詞も傳兵衛、泣く目を拭ひ、詞
一旦いひかはした詞を立て、俱に死
なうと覺悟して、義理を立てぬくそ
なたの貞節、忘れはせぬ嬉しいぞや
思ひ廻せば廻す程、我こそ死なで叶
はぬ身、そなたは科のない身の上、
俱に死んではお二人の歎き、命なが
らへなき跡の、さび甲ひを頼むぞこ
詞にわつと泣き出し、そりや聞えま
せぬ傳兵衛さん、お詞無理は思は
れど、そも逢ひかゝる始みより、末
の末迄云ひかはし、互に胸を明しあ

ひ、何の遠慮も内證の、世話しられ
ても思にきぬ、ほんに女夫と思ふ物
大事のく夫の難儀、命の際にふり
捨て、女の道が立つ物が、不孝共惡
人共、思ひあきらめコレ申し、一所
に死なして下さんせと、隠せし剃刀
取直す、詞、い、い、まで待おれや
い、く、コリヤやい、これで死ぬ
るご命がないぞよ、コリヤまあ何の
事ぢや、さんご分らん様になつてき
たわい、殺しに來たと思ふた傳兵衛
殿より、今ではわれの方が手強うな
つたぞよ、コリヤママどうしたらよ
からうぞと、云ふもおろく母親も
詞、オ、さうぢや、我が子が可愛
く、子故の闇に脇ひら見ず、こ
れまでおしゆんがお世話になつた、
恩も義理も辨へず、一圖に中を引合

けうこ、思ふた母は義理知らず、賤しい勤する身でも、女の道を立て通す、娘の手前面目ない。そなたの心に恥入つて、何事もいひませぬ、傳兵衛様と一所にの、コレ死出の道連れしやいのう、したかこれ申し傳兵衛様、定めて親御様達もござりませうが、親の心さいふ物は、人間はおろか、たこへ鳥類畜類でも、子の可愛さにかはりはないもの、おしゆん傳兵衛と云はす氣が、もしやお前が死なじやつたさ、親御様が聞かしたつたら、悲しうて、此世に残つて居る氣はあるまい、何國いかなる國の果、山の奥にも身を忍び、ごうぞ遁れて下さりませ、娘か心に恥入つて、天にも地にもかけがへない、可愛我子を心中に、合點してやる親心

爰の道理を聞分けて、コレ拜みます頼みますさ、手を合はしたる母親の子故に迷ふ闇の闇、二人は何ぞ詞さへ、涙に涙結ばるゝ、血筋のわかれ與次郎も、涙の雨の古布子、袖喰ひしぼりしやくくり泣き、ア、傳兵衛様の泣しやるも道理ぢや、道理々々云ふて居ては、ねつからばつからいつ迄も分らぬ道理ぢや詞がコレ傳兵衛様、母者が今の詞、御合點が参りましたか、エコリヤ我も得心してくれたか、合點がいたか、得心してくれたか、合點がいたか、サ、い、合點したらばごうぞ此場を、立退く分別、併し其形では人目に立つ、京の町を放れる迄、此編笠で顔をかくし、幸ひの猿廻し、まめで二人が末長う、目出たう女夫になりませ

げる、門出の祝ひに此與次郎も、お初徳兵衛も祝言の壽、此方衆も生別れの盃、イヤ、祝言の盃も祝ひ諷ふも聲びくに有田ウタお猿はめでたなや、合ヒヤウシ、舞入姿ものつしりさ、詞コレ去りさば、ノウあるかいな、さんな又あるかいな、詞オ、徳兵衛様ござんせ、餘りこな様が来やうが遅いによつて、お初様は顔真赤にして、腹立て居やんすわいのうコレお初様、舞様が盃をしたいさいのう、機嫌直して盃を、戴かense、コレ、い、い、だ、く、ノ、ウ、盃、を、さんな又あるかいな、詞ヤコレ、コレ舞様、足で盃をさすばあんまりつれない、それでは嫁御様が戴かenseぬわいのう、ひぞらすさほんまにさしてやらんせ、さうぢや、

こでお初がいたゞいた物ぢや、コレ
 いたくのう盃を、さんな又あるか
 いな ヒヤウシ コレ嫁御の晝寝もころ
 りさせい、ナコレエあるかいな
 さんな又あるかいな 詞コレ、
 餘りつれなうさんすによつて、お
 しゆんヤアノ何嫁御様が起さんせぬ
 わいの、そこらでちよつと起したり
 〳、エ、コリヤ、コリヤヤイ、コ
 リヤ、去りさば、ノウあるかいな
 さんな又あるかいな、ヒヤウシ起た
 ら互ひに抱付きやれ、オ、それで機
 嫌が直つたそ、エ、いゝあるかいな
 さんな又あるかいな、くるり返つ
 て立たりな、立てくれ、コレ、コ
 レ立しやませ、序でに日和を見てた
 もれ、ア、よい女房ぢやに、ノウ
 あるかいな、さんな又あるかいな

ヒヤウシの日和を見たらば落ちてたも
 〳、オ、さうぢや、お猿
 は目出たや目出たやな、詩サ、
 、きり、此家を猿廻し、まさる目
 出たう何時迄も、命まつたう仕てた
 もと、目は見えれども見送る母、詞
 も此世で聞き納め、心の内の暇乞ひ
 明日の噂と形ふりも、やつす姿の女
 夫づれ、名を繪草紙に聖護院、森を
 あてぎに 三重 M たどり行く。

造 花 製 所

六 花

劇並慶
 場ニ慶
 装店甲
 飾頭用
 造室花
 花内輪

大 阪 市 南 區 壱 橋 町 御 堂 筋 西 入
 電 話 場 東 成 區 壱 橋 町 八 腹 見 番 町



神崎揚屋の段

浅造 豊竹駒太夫
 改メ 鶴澤重造
 鶴澤 綱右衛門
 鶴澤 網右衛門
 野澤勝市
 豊澤仙糸
 豊澤猿糸

ひらかな盛衰記

神崎揚屋の段

この淨瑠璃は源平盛衰記によつて旭將軍義仲の没落、高綱と源太の宇治川戰陣争、逆櫓、船の梅のこころ等を取入れて趣向したのがこの「平假名盛衰記」でこの神崎揚屋は第四段目の中、切になつてゐます。作者は文耕堂、三好松洛、淺田可啓、竹田小出雲、千前軒等の合作で初演は元文四年四月の竹本座で、この四段目は百合太夫、内匠太夫、播摩少掾が語つてゐます、この時吉田文三郎が巴御前、船頭松右衛門、梅ヶ枝の形を遣ひ、梅ヶ梅の人形に長さし金を初めて使用しました。梅ヶ枝が無間鐘を撞く型は元祖瀬川菊之丞の舞

靈姿を取入れたものだと言はれてゐます、この揚屋の段の内容を申し上げます、旭將軍木曾義仲の侍女お筆の妹千鳥は敵方の梶原平三景時の屋敷に腰元奉公に上り景時の嫡子源太景季といふ餘倉一の風流男と戀仲になります、景季は宇治川の先陣争ひに義理で佐々木高綱に先陣の功名を譲つた不覺から切腹すべき處を母の延壽の慈悲で千鳥と伴に勘當となり、千鳥は源太景季を養ふ爲めに神崎の千歳屋へ梅ヶ枝と名乗つて身を沈めます、源太は勘當の雪辱に一の谷の合戦に華々しく出陣したいが頼朝公より拜領の鎧を三百兩で入質してゐるので其金子調達のため梅ヶ枝も胸をいため夫の爲なら此身を割いても

人形

一、傾城梅ヶ枝 吉田榮三

一、姉 お筆 桐竹紋十郎

一、揚屋亭主 吉田市松

一、梶原源太 桐竹政龜

一、源太母圓壽 吉田小兵吉

一、仲 居 吉田覺三郎

一、仲 居 吉田文之助

さ、兩人苦しい瀬戸際にふさ思ひ浮かべたのは小夜の中山無間の鐘の故事であります。思ひつめた念力で手水鉢を鐘になぞらへ打たんさします。二階から母延壽の情けで三百兩の小判が降つて来ます。そこへお筆が尋ねて来て、千鳥と源太は仇同志とされますが母延壽の自害で心もさげ景季は勇ましく出陣するさいふ俗説の「梅ヶ枝の手水鉢」の一段であります。

床本 神崎揚屋の段

世なりけり爰も名高き難波津に戀の船着數々の多かる中に取分けて酒汲かばす神崎の里の色宿千年やは客にたへ間もなかりける殊に今宵は晴の御客と書院座敷の掃そうち亭主が袴中居も揃への紅も圓に植て隠

なき大名客御入さ表の方賑はしく人目を忍ぶ旅乗物、お供廻りもかるくご地に鼻付て主も答拜お出を待やこかれしと、追縦輕薄切聲の切戸えまつ直に昇込む奥座敷梅が枝ごのへ人走らせ夫お菓子たばこ盆釜を滋す首羽山馳走ふりさぞ見へにける雪や糞や花ちる嵐かはひ男に偽なくば本の心で淡路嶋千鳥も今は此里へ身をば賣れてやつ梅の名も梅ヶ枝の突出しには名木なら方もなく千こせがもこに入り亭主立出エ遅い梅ヶ枝殿今日のお客は東國の箱入の駿河小判すつしつさしたおさばきサア、奥へさ云ければ東國さおしやんの其客の年ばい廿斗りて、つくりさ色の黒い鬘男かへげもない

事くそれで心が落付た私も爰に待合せ、逢ればならぬ人が有つと合點そこは我等が請込禿衆で座敷をくろめんおまへの御用は彼ふかまの源太殿にあいの襖を引立てこそ入にける此姉殿はなせ遅い杉を迎ひにやつたるに早ふ來はなされいで心せかれやアしんきき待に程なく姉お筆千鳥に逢が嬉しさに足もいそぐやり手が案内梅ケ枝見るよりのふ待兼た姉様さつきに道であひし時ひたい事の數々も人目を遠慮チいそりや姉も同じ事何から角からいばふやらようまで居てたもつたおまへも御無事で嬉しい久々便も聞ませぬが爺様もおまめに有ふやつぱり桂の里にお住なされてござるかへ御持病はおこらぬかご聞かけられてお筆は涙まださう様の事しらすか知ぬかさは氣遣ひごうぞいなアノさう様もおまなされたかいのふエーはつさ斗りに梅ケ技は暫し涙

にくれけるがア思へばわしは不孝者爺様は息災なまめでござると思ふから我身の戀に行先忘れ未々めんごう見さけふご約束せしお人が不應に勘當受賜ふ男の爲に此勤め身の徒に親の事思はなんだ罰が當つて命日忌日がいつちやうら知すにくらした不孝の罪姉様こらへてさう様の御位牌へ詫言をして下さんせさわつとさけへばチ悔は道理其上にまだ悲しきはお煩ひへも有事か又にかかり果賜ふ其様子は自が木曾殿に官假初ならぬ御主人の御臺若君諸共父の方にかくまひしが桂の里にも居る事叶はず都を出て大津の泊り追手の者が寢込へ切込くらがり紛れうるたへて相宿の順禮の子ご若君ご取違へた其簾相が御運のつよさ先の子は殺され若君はつゝかなく慥な人にわたせしが悲しいは母御様其傍で相果隼人様もあへなき御最後、親の敵も討たさにそな

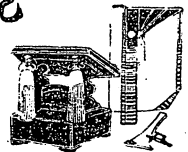
儀太夫海瀾橋水做元

見佐爲度共化淨唱道具

電話船場
一八六二番

加島屋 竹中清助

大阪東區唐物街四丁目御堂筋西入



たの行衛しるべの人に聞き尋ねし此神崎、
廻り逢たば兄弟の縁のふかさ女でこそ有ふ
す共兄弟の心を合せ本望さげう姉が力に成
てたも、頼むば妹斗りぞこ語も聞も涙な
る、のふ姉様悲しい中にも敵を討ち梅ケ枝
むごも様への言譯其ま敵は誰でござんす
へ、ア、聲も高が壁に耳諸方の人の人込む
色里敵に洩れては一大事さ咄しの半へ亭主
かけ出サア梅ケ枝様早ふくおまへの脊だ
け金子積んで身請の相談座敷は金でまばゆ
ひそこを不動になさるゝはごうした心底、
せひにお供さ手を取ればアもふそこへ行
さいふに聞き譯ないコレ姉様今は何にも咄
されぬ後に必ず来て下さんせ成程く今咄
した事せひ今宵は延されず、其用意して待
て居る後にくこやくそくかためお筆は旅
宿へ立替るサア太夫様のお出の様子御座敷
へ注進さきをひかしてて走行くやほんに何

じやの此梅ケ枝が心もしらず身請くご取
持顔、いやらしい夫はそふも源太様暮方か
らお越なされと香嶋迄文やつたになぜ遅い
事じや迄早ふ逢たや顔見たやあはじごふし
てかふしてごたばこ引寄くゆらする胸の
思ひは日に千度夜ごごくに通ひくる梶原
源太景季心をつくせし身の廻り大盡小袖長
羽織ほろろく頭巾紫の色に引るゝ揚や町
千年が奥を窺へばおれを待のは疊算丁ご
よい首尾幸とすつと通れば梅ケ枝はこた
つにさんご身を脊け煙くらべんあさま山ご
そしらぬ顔でふくきせる是歌所じやないき
たはいの何ご機嫌に入ぬやらめつきりごも
たせぶり大名客の襟に付御勿體で思すか
我等が様な浪人のかびた襟にはつかれまい
とすんご立を待しやんせ座敷斗りを勤る答
でけふ爰へもらはれたば文でしらせて合點
じやないかへ色も戀も打ちして心底づくの

一 隨 西 關

大 歌 舞 伎 の 殿 堂

・ 堀 頓 道 ・

座 中

ふたりが中に舌所ぢやござんすまい、おまへご一たいかふなつたはなみ大たいの事かいなわしもしいふ事たんご有ご袖から袖へ手を入れてじつご引寄引しめて遅ふきながら其いふり、にくい男ご目にもろき涙ご戀のならはしなり、もふよいなきやんな疑ひ暗た扱そなたに言事有り今夜七ツの出汐に父を初め弟の平次景高一の谷へ出陣某も能時節軍勢にまぎれ下るに付そなたに預た産衣の鎧請取りにきたわいのご聞にはつご當惑の色目見て取景季いや〜氣遣ひしやるな長ふ別れる事でもなしぜび今度は行かればならずおこも兼てしる通りもご某は頼朝卿の烏帽子子それをかうに勸當の詫せぬかご父の思はく世の人口此度平家ご戦はじ分捕高名響をあらはし今の難儀を昔語り悦んでたも梅ヶ枝ご何心なく語るにぞ思ひもうけし事ながら俄にはつご胸いたみ其鎧

か何ごしたわたしご方にはごふかうないヤア〜源太も聞より狂氣の如く身をもみあせり様子が有ふ仔細を語れご氣をいらてばそれ其様に浮世の事にうごいのか大名の懐子浪人の中を、苦勞させまいご此神崎へ身を賣突出しの其日よりおまへを客の名當にしてみんな私ご身揚たごへ世に有人でも里の金にはつまるも習ひまして勤の身なれば金のなる木は有まいしはへる土は持まいしお主の勤當ゆりる迄ごいつもの揚屋に吞込せつごり〜し揚代三百兩の金のかはりに其鎧はやつたわいな、扱は其金子がなければ鎧は源太ご手にいらぬかハアはつご斗りに當惑し暫し詞もなかりしご、もご此鎧は頼朝卿に拜領家にも身にもかへざるをしなしたご殘念や今は悔てかへらずご胸押くつるげ刀を取れば梅ヶ枝あはて押ごごめこれやまあごぶうるたへてじやしない

映 畫 演 實

歐米映畫の
名篇を最も
見易く提供
する映畫殿堂

座 天 辨 館妹姉の座竹松で堀頓道

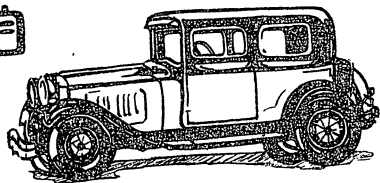
でも大事ないいや〜今夜の出陣をばづれ
 一生埋れ木ご成りのたれ死せんより只今切
 腹そ〜放せサア〜其鎧さへ入に入ばおま
 への望は叶ふでないかして其金子はごふし
 て調るご御ふし人も立ふそこがお前さ談
 合づく奥の客に身を任せたらしなば二百兩
 や三百兩の金子は自由扱ばおれ故身をけが
 すか夫の難儀にやかへられぬふ便の者の心
 やなたごへ死でも忘れぬ涙ぐめばア、女
 房に何の禮おまへが爰にごさつては客をた
 らすに心も置かれるチ、尤々後にこふぞ
 や首尾よふしやが氣をもんで持病の瘡借
 錢のかはりに癩おこらしたもんなさわか
 れてこそ歸りけれ後見送りて梅ケ枝は暫し
 涙にくれけるが必ず氣遣なさるゝなエ、わ
 たしが心當の有るさいふたばみんなうそ
 おまへの命も助けたいばつかりじやばいな
 何の好もない奥の客も三百兩の金子くれふ

ぞ今宵中に調へれば鎧も戻らず源太様の望
 も叶はず金子ならたつた三百兩でかはい男
 殺すかア、を金子がほしいいなア二十八で
 文付られて二九の十八でつい其心四五の廿
 なら一期に一度わしや帶さかぬエ、なんじ
 やの人の心もしらず面白さふに諷ひくつさ
 るあの歌を聞に付ても源太様に馴染箱を立
 退君傾城になりさがつても一度客に帶さか
 ず一日なりさ夫婦にならふも思ひ思はれた
 女房をふり捨此度の軍に響を取り勘當がゆ
 るされたいと思召男の心はごんな物じや
 何かに付て女程思ひ切りのない物はな
 界故なら勤めするもいさばれごまだごの様
 悲しいめを見よふもしれぬそれも金子故何
 をいふても三百兩の金子がほしいしや帶
 さかぬ甘なら四五の四五の甘らら一期に
 度わしや帶さかぬかへらぬ昔戀忍ぶほんに
 それよあの客殺して身請の金子盗ふイヤイ

...は車動自

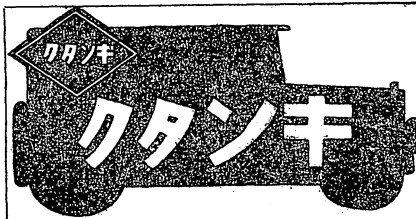
トルペズール

...を用乗御



ヤ／＼若仕損じ殺されてはさゝ様の敵も討
 れずアゝどふせふな最早日本國に梅ヶ枝の
 祈る神も佛もないかいア、チ、それよ夫故
 には石に我たる女も有り我は賤しき流の身
 なれど一念は誰におさらん岩ほごなれる手
 水鉢水結び上げ口すゝぎふし拜みく／＼人に
 しらせじ聞せじさひしやく追ッ取り傳へ聞
 く無間の鐘をつげばうさゝ自在心の儘是よ
 りさよの中山へ遙の道は隔たれど思ひ詰め
 たる我念力此手水鉢を鎌さなぞらへ石にも
 せよかれにもせよ心ざす所は無間のかれ此
 世は蛭にせめられて未來永々無間墮獄の業
 をうく共だんないく／＼大事な海川に捨た
 るかれ一つ所へ寄せ賜へ無間の鐘を觀念
 す面色たちまち紅梅の花はちり／＼心も髪
 も逆立上りひしやく持手も身もふるはれす
 でに打たんさふりあぐる二階の障子の内よ
 りも其かれ爰にさ三百兩ばらり／＼と投出

す、深山嵐に山吹の花ふきちらすごまくに
 て爰に三兩かしこに五兩はば夢かうつゝか
 やごなたかしらぬが此御恩死でも忘れぬ
 くご嬉しいやらこはいやら拾ひあつむる
 心もそやるそで引ちぎり三百兩つゝむにあ
 まる悦びなみだ鑑むばりの此金と押いた
 きく／＼勇いさんで走り行く。



はり歸お
 の定指樂文
 でクタンキ



床本 廊物語の段

- 一、八重 桐 越名太夫 改メ竹本南部太夫
- 一、源 七 鶴尾太夫 改メ竹本長尾太夫
- 一、澤 湯 姫 豊竹つげめ太夫 豊竹和泉太夫
- 一、腰 元 竹本相生太夫
- 一、局 藤 浪 竹本源路太夫 竹本鏡太夫
- 一、太田 太郎 豊竹文富太夫 豊竹綾太夫 豊竹辰太夫 豊竹さの太夫 竹本辰太夫 竹本さの太夫 竹本千駒太夫 竹本浪花太夫 竹本長子太夫 竹本陸路太夫 竹本播路太夫
- 一、岩淵 藤馬

しやべり
 姫 山 姥

廊物語の段

この淨瑠璃は正徳二年七月竹本座に書下されたのも初演で作者は近松門左衛門。この段の内容を申し上げます、坂田藏人時行の遊女八重桐に馴染み勘當されて、父の仇敵平正盛を討つに放浪中煙草賣に身を窵し大納言兼冬が館で、頼光と婚約のある澤瀉姫の病氣を慰めのため三味線を弾いてゐるこ、これも時行に別れて流浪中の八重桐が來合せて廊話にこそよせて時行の無情を罵り、時行の妹糸萩が小夜中山で物部平太を討つた事を語つたので、時行は身を愧ぢて自殺し、其魂魄が妻八重桐の胎内に入つて豪勇無双の怪力を現はすこいふ後段足柄山の前置であります。

地天樂の夏初

居芝の館 央モド 中コ
 樂娛の館 松の館 映
 畫映竹松の館 畫映

一、腰元

竹本文字大夫

松浦瀉、領中磨山の石よりも、積る思

野澤吉彌

ひは猶重き、岩倉の大納言兼冬公の御妹

野澤勝助

澤瀉姫と申せしは、源の頼光と、御縁の

野澤八助

契約も、互に待てば久方の、月日重り年も

豊澤太助

立ち情盛りも徒に、右大将高藤が讒言故、

豊澤二助

頼光は行方無く、御文の音信さへ、枯野に

鶴澤寛二

かがる秋の蟲、世に便り無き憂き臥しに、

鶴澤二助

苦し御短慮の事もやと、お寢間の奉行不寢

鶴澤太助

の番、女中の外は男混ぜずの大役は、女護

鶴澤太助

の島に異ならず。お局藤浪御傍に立ち寄り。

桐竹紋太郎

詞コレこゝなお子。何故に浮きくなされ

吉田文作

ませぬ、是程大勢集つて、浮世話の高笑ひ

吉田之助

も、皆お前を勇めの爲、お患ひでも出た時

吉田市松

は、親御様への御不孝、日頃のお氣に似合

桐竹紋十郎

ひませぬと、勇められても勇まぬ顔。詞ア

吉田玉松

又、又局の氣詰りな異見、聞きたう無い。日

桐竹門造

本國の花紅葉を、今此處に移しても、何の

吉田玉市

心も勇まうぞ。吉日極まり頼光様へ嫁入り

大い

大い

人形

- 一、澤瀉 姫
- 一、腰元 叶門
- 一、腰元 更科
- 一、局 藤浪
- 一、傾城 八重桐
- 一、煙草屋 源七
- 一、太田 太郎
- 一、岩淵 藤馬
- 一、組 子

座王のーヴレと畫映

切封の畫名的体絶
一ユヴレぬさるゆを隨追



りぼんさうご

座竹松

して、今頃はお腹は帯を結ぶ筈を、あの右大將づらめに妨げられ、剩へお行衛知れず何處を宛處に一筆の、間はせの文さへ長枕此長の夜を誰ご寢よ、おりや泣くまいと思へども、涙もどうも堪忍せぬ、堪へてたもこぼらくと、玉を貫ぬく御目元。腰元、茶の間、仲居まで、お道理様やと諸共に、貰ひ涙に暮れば、お局は氣の毒がり。詞ア、何ぞいの、お力は付けもせず、和女衆までめそぐと、忌々しい措いてたも。ヤアそれは爾うと、煙草賣の源七は未だ見えぬか、きさく者の通り者。今にも來たらお姫様まじくらに迎へ鬼にして遊ぶまいかコリヤ氣の變つた思ひ付、早う煙草が來たれかし、煙草くご待つ宵の、松葉煙草の柔らこき、女中M仲間を賑はしき。昔は色に登り詰め、今は浮世に、下り坂田の時行き、埋れし名も父の仇、晴らさんと思ふ

志、厭かぬ夫婦の中をさへ、三行半の生別れ、袖は涙の革行李を、今は活計と引擔げ、刻み煙草、油引かすご賣歩く。ソリヤ煙草が來たわいと腰元中、早うくご呼入れ。詞コレコレ源七。先づ革籠は預かる、尻袋も下しやいの。お姫様より御意がある。其方は以前は歴々で、悪性故に仕損ひ其形になりやつたげな、傾城さやら廓さやら大内には珍しき、三味線の一曲を常々のお望み故、コレ三味線を調へ置く。サアサア所望ごありければ。詞ア、つがもない。尤も以前は傾城の一ツ買も仕り、三味線、鼓弓、淨瑠璃、もんさく、のら一卷の諸藝なら、此方へ任せて奥座敷に、吉野の山の連弾も、昨日の昔今日ば又、吉野煙草の刻實、股引かけて三味線さば、茶漬に鯉のお望、平更御免と逃出づるを、女房達引き留めて。詞ソレく其言ひ様も面白い。何を

新 國 劇
更 生 一 年 紀 念 公 演

居芝おるれら見に輕氣おちつい

道 頓 堀

座 角

正 午 五 時 半
二 回 開 演

言ふもお慰み、平に頼むと強ひられて、源七下地好きな道ヤアてんぼの皮遣りましよと、箱より出だす三味線の、ウタは昔に變はられど、弾くその主のなれの果、親の撥駒紙駒の、音色優しく弾ませり。合紙子の袖に置く露と、共に離れし妹春の中、あはれ昔は全盛の、松の位も冬枯し、風呂敷包み行先は、知らぬ旅路にまぼくこと、築地の蔭に休らへば。合ヤア珍しい三味線なんぼ大内方でも、洒落の浮世に廻り来る車寄より立聞けば。合ハテ不思議や彼の小唄は、我身廓にありし時、坂田の藏人時行殿に馴初め、作出だせし替唱歌、彼の人ならで誰が傳へた。懐しや、何卒入込み見たいものじやと、出放題に聲を引上げ。詞サア、これは難波の遊女町に、誰知らぬ者も無い傾城の祐筆、濡一通りの状文なら、恐らく私が一筆で叶はぬ戀も假名書筆、

ひらりやらりさかすり墨、生娘、遊女、妾者、後家、尼、人の女房まで、段々の書分けは、私家の傳授事。若しそんな御用なら、お頼みあれぞ云入れたる。奥には女中耳を澄まし、さつても變つた寶物、詞いざ呼び入れて痴語文書かせてお慰み、更科、哥門呼んでおじや。あいさ答へて、二人連にて走り出で。詞是なう傾城の祐筆殿は此方か。此御殿の姫君、何やらそもじに御用あり、此方へいざご手を執れば。ハア御用さは何ならん、お目もじ様に夕顔の庭の飛石すな、ちよこちよこ、さお座敷へ、何の遠慮も並居たる、内裏女臈に塙うてせぬ、何れそれしやと見えにけり。煙草賣の源七も何心無く傍近く、顔とを見合はすれば。ヤア離別せし女房。南無三寶と木隠れの、女はそれと水臭き、男畜生人で無し、赤恥かかせて退けうかこ

皆様の劇場

その大衆的興行は御好評を戴すまゐりてい

ごとうほんり

五月おは馴染

浪花座

志賀廻家淡海一派

飛立つ胸も人目の關、押沈めく、心を碎
 き折々ば、尻目に睨むも戀なれや。姫君何
 の氣も付かず。これ喃紙子。詞和女の物こ
 し爪端れ、いかさま常の女子で何し、爾う
 した形になりやつたは、定めし深い仔細有
 らん、一河の流れも他生の縁、包ます語り
 やさありければ。詞ア、何方かば優しい
 お言葉、お尋れ無くとも云いたうてく、
 胸のたぐる折しも、然らばお訴申しませう。
 恥しながら、私昔は浮河竹の傾城、萩野
 屋の八重桐さて、大夫仲間の立物さ、云は
 れし程の全盛の、末も遂げぬ仇戀に、上り
 詰めて此通り、夜なく替る大盡の、中に
 も坂田の某さて、突出の初日より、不圖逢
 初めてまる三年、何が互の浮氣盛り、登る
 程に、たまり天の中二階、夜晝なしの戯
 れに、かけ鯛様と異名を受け、水も洩らさ
 め仲なりに、詞又同じ廓にをだ巻さいふ

大夫、彼の男にゆき付いて、毎日百通二百
 通、書きもかいたり痴語文は、大方馬に七
 駄半、船に積んだら千石船、車に載せたら
 ぬいやらさ、合木遣りでも音頭でも、祈つ
 ても禁厭なふても、微塵氣もない二人む仲。
 彌々つにつて逢ふ程に、をだ巻大きに腹を
 立て、ア、忘れもせぬ八月の十八日の雨上
 り、月は山よりおぼる染の、襦ひらりと取
 つて捨て、合無垢一ツに引しこき、歷も
 あらばに駈け來たり、私の膝にふうばり、
 さんご居かゝつて、これ八重桐、詞餘り見
 られぬ嫌じやそや、サア男をたもるか、た
 もらぬか、否か應か、應か否か、ふツに一
 ツの返答が聞きたいと、胸づくしを引摺む、
 合此方も一期の大事ぞと、弱身を見せず。
 詞こりや、をだ巻さやら、くだ巻さやら、
 光は食はぬ直しや。此廣い日本に、あの
 人ならで男はないか、よし無いにせよ有る

新緑の

高野山

超特急

二時間の爽快

初夏の海きららな

和歌の浦

スピードに於て

其感に於て

斷然業界の尖端に
 立つ超特急車へまひ

山野高——山歌和——波雄

南海電車

にせよ、夫程ゆかしい男なら、何故に先に惚れなんだ、男盗人いき傾城さ、いひさま取つて投付くれば、明障子打破り、合繼三味線を踏粋き、合縁より下へころくこ、這拍心まで轉かゝり、木櫛、南天めつきりめつきり、切石の上へま俯向け、鼻血は一石六斗三升三合五勺。詞そりやこそ喧嘩が始つた、合だじ、此方の太夫様に退けをつけては叶ふまい、加勢をやれさいふ程に、合遣手、引船仲居、飯焚、合出入の座頭按摩り、神子、山伏に占やさん、詞雪踏片足に下駄片足、草鞋掛で来るもあり、臺所から座敷まで、太夫様の返報さ、彼所では叩き合ひ、詞爰では打合ひ、をどり合ひ、茶棚、籠煙草盆、當る物を幸ひに、打めぐ、打割る、踏砕く、めりくびしやりと鳴る首に、夫や地震よ雷よ、世直し桑原々々さ、我先に逃げさまに、水擔桶盥

に轉けかゝり、座敷も庭も水だらけになる程に、南無三海嘯が打つて来るは、なう悲しやと喚くやら、秘藏の子猫を馬程な、鼠がくはへて馳出すやら、屋根では鼯が踊るやら、神武以來の悋氣いさかひ。此事世上に隠れなく、彼の男は其場より、親子様の勘當受け、我身も廓を夜脱けして、根本戀路の浮名さる、鍋の蓋取る杓子取る、馴れぬ世帯の其日過ぎ、男めゆみでござんするア、あんまりじやべつて息が切れた。コルお茶一つ下さんせこそ語りける。姫君をはじめ腰元衆、扱心中の女郎や、たさへいかなる身になつても、思ふ男さ添ふからは、面白からうさ、のたまへば。詞されば未を聞いて下さんせ、其の男の父親が、聞討に討たれ、敵討たれば叶はぬさ、私さば縁を切り、行衛もなう別れて、親の敵を狙ふさは、跡かたもなきあか嘘、我身に秋風立ち

るま集に線沿所名の畿近

大軌電車

奈良公園の新線
初夏の生駒山の夕
あやめ池の温泉郷
あやめ池の花菖蒲
バスで若葉薫る
奈良、春日、奥山めぐり

お歸りに
終點前
新温泉へ
食堂料理旅館

かけれども、何しほにも退かれもせず、親御様の死なんしたを、屈竟一のかこつけに敵討この口上は、釋迦でも一杯参るこゝ、まんまご私をたばかり。女房には紙子を着せ、其身はちやんと榮耀らしい、若い女中に立交り、三味線弾いてあけつかり、くさりくさるを見るやうな、日本國の姫御前の因果を一ツに固めても、我身には及ぶまい初對面の皆様へありし昔の讖悔話、お恥しやそばかりにて、おろく涙にくれければ。詞ヲ、道理く身にかゝらぬ此方人さへ、煙たうて堪へられぬ。さりながら構へて短氣な心を持ちやんなや、まだ話ないこゝもあり、奥へ通せご姫君は、御簾の内に入り給へば、サア苦しくない奥へおじや、此方へくご人々は、皆々M一間へ入り給ふ。跡見送つて八重桐、さらば奥へ参つて、憎さも憎し男の懺悔、いふてのけうさ入らん

さするを、時行取つて引戻し、はつたご眼め。詞エ、遠がは流れの女じやな。親の敵を討つまでご、相對づくの離別ならずや、只今の言葉は誰にいふあてご、未だ敵の行衛は知れず、心をくたく夫の體、憫れごも思はず、已れが榮耀に引當て、面白さうな仇口、エ、怨めしやそばかりにて、無念の涙にくれければ。詞ム、あまがくしい顔はいの、親の敵は幾人あるぞ。こなたの妹御、糸萩殿さやらんが、先月二十三日小夜の中山で討ち給ふ、物部の平太は敵ではないかいの。時行はつご驚き、何妹が敵平太を討つたるごは、必定かサ。定か、真か、碓井の荒童さいふ人の語ひ、やすやすご討つて源の頼光様を頼み、かけこみごは日本に隠れない、忝くも頼光様、妹御をかぐまひ給ふ意恨に依つて、右衛門頭平の政盛、清原の右大將ご心を合せ、頼光

るれ乗にすたま

媚明光風
り狩莓の尾鳴

車電神阪

様を讒奏し、勅勘の身となり給ふ。是程大きな騒動を、今迄知らぬは狼狽者の浮名を世間へ觸れうまいふこそか、エ、おさましい、世につれて、心までも腐つたかき、縋り付いて泣きければ、時行つつ立ち。詞さては敵故頼光様の御難儀となつたることや妹に先こされ、親の敵を討たずとも、政盛右大將は敵の敵なり、いで二人の首さつて、頼光の御恩報じ、苗字の恥を雪がんと躍り出づるを引こめ、詞をそれごとく、夫は悉皆氣違ひか、討つに討たる、程ならば頼光様に油断が有らうか。彼等は威勢まつ最中、討たれぬ仔細があらばこそ、日蔭の御身さなり給ふ。こなたが今駈出して、心易う首取らうとは重れて恥がかきたいか。こなたが今迄悪戯で、娘をころりと落したと、首をころりと落すとは、雲泥萬里のこはぢしむる。時行道理に責められて、行き

つ戻りつ齒がみをなし、拳を握り立つたりしが、もう此上の分別なしと華籠の中より氷のやうなる鐵通しおつ取つて、腹にくつと突立て、脊骨をかけて引まはす。女房は狂氣かき、縋り付けば、アツく音高しく、詞おこまが今の悪言は、伍子胥が呉王を諫めたる、金言より猶重し、恐らく此一念項羽紀信が勇氣にも劣るまじと思へども、時來たられば力なし。詞夫までまだまたながらへ、臆病者腰拔き、指されんは無念の上の無念なり。我死して三日が内、御身が胎内に苦みあらば、我魂宿りしと心得、十月を待つて誕生せよ。神變奇體の勇力の、男子となつて、今一度人界に生れ出で、政盛右大將を亡さん、詞おこまが身も今日より、常の女にこそ變り、飛行通力あるべきぞや、深山幽谷を住家とし生まる子を養育せよ。さらばくと諸共に、劍を

新京阪電車

超特急の爽快

快速の新記録

翠巒滴る

嵐山の新区

抜けば紅の、血は夕立を争ひし、最後の念
 ぞ寝じき。あらし思議や切口より、炎のま
 るかせ女房が、口に入ればうんさばかり、
 其儘息は絶えてけり。かゝる所に若侍五
 六十、無二無三に群つて、屋方の四方を追
 取りまき。詞ヤア／＼兼冬、右大将高藤公
 より、汝も姫を召さるれども、頼光と縁組
 まで承引なき條憚り千萬、夫に依つて姫を
 引立て来るべしとの御使、亂れ入つて奪ひ
 取れど、喚き叫ぶ其聲に、兼冬公驚き給ひ
 詞主ある娘を奪はんとは、人畜類の右大将
 返答するに及ばず、あれ追散らせとのたま
 へば、いふにかひなき公家侍、防ぐかたな
 く見えたる外に、伏したる女むつくさ起き
 面に立つたる奴原を、こつては投げ／＼姫
 君のおはします、御簾を圍ふて立つたるは
 さながら鬼女の如くなり。政盛が家の子太
 田の太郎、數にも足らぬ下主女、何ごさか

仕出ださん、アレ引出せと下知すれば、聲
 を力に數多の家來、おめき叫んで「**M**」戦ひ
 しが、女にまねな働きは、人間業さば見え
 ざりけり、此勢に恐れをなし、返し合す
 る者もなく、皆ちり／＼に落失せけり。チ
 いさもさうずさもあらん、我魂は玉の緒
 の、御命恙なく行末待たせしませと、姫
 君に一禮し、合今よりは我いづくをそこ
 白妙の、三十二相の顔も、合怒る眼物凄く
 合しまだほほまに、合怒ち夜叉の鬼瓦、
 唐門、樓門、四足門、合塀も築地も飛び
 越え、はれ越え、跳れこえ、飛越え雲をわ
 け、行衛も知らずなりにけり。

京阪電車

沿線新線に埋まる

てし召に一カスンマー口の速快

緑新の治宇 なか豊色土郷
 地園遊方牧 の快爽眺一
 り廻島湖琵琶 新清の夏初

四ツ橋畔より

— 消息 日誌 —

△四月十日

四月興行の初日開場。

△四月十二日

大久保侯爵夫妻、柴田知事夫妻が岡嶋伊八氏の請待で阪國バス専務の大矢寧明氏等同道にて見物、白井社長、福井常務等ご記念撮影させられた。

△四月十三日

京都より三井男來觀さる。

△四月十八日

横濱より捜真女學校生徒五十餘名職員引率の下に觀覽、別室で紋十郎から靜の人形に就て説明をきく。

四月廿日

大阪中央放送局の幹旋で高橋兵庫縣知事、神戸市長をはじめ扇港要路の名士も三十餘名來觀せられた。

石田神戸市電氣局長、堀口海洋氣象臺長、田崎神戸商大學長、黒瀬神戸市長、山脇元兵庫縣會議長、藤岡兵庫縣警察部長、古宇田神戸高工校長、坂間兵庫縣内務部長、水野神戸郵便局長、篠崎神戸税關長、東神戸裁判所長、梅津大阪造幣局長、廣江大阪放送局長等。

△四月二十一日

大丸主催の大松會々員五百餘名の慰安會が開催された。

△同日

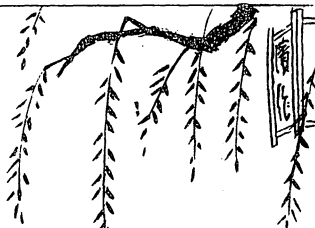
昭和の俳聖松瀬青々氏が御家族連れで來觀、別室で初菊の人形を親しく見られ、即吟を下すつた。

『行燈の一つ酒屋の春の宵』

樂文夕の夏初なかやはさ
作濱なつおはり歸おの座
をり上召お盡一で前板の

濱作

町



△四月二十四日

大阪紳士連の好き者を以て組織されてゐる『文樂會』の例會が開かれた。

△四月二十五日

全道府縣會議長懇親會開催。百八十名の自治團體の統帥者が響を並べて人形淨瑠璃の醜酬味に蕩酔せられた。更に食堂で歡を竭し記念撮影をしたが主なる顔ぶれは、

丸山北海道、伊藤東京副議長、岡東京市部、並川京都、井上京都副議長、高橋市部、薄大阪、土井大阪副議長、石川神奈川、岩佐兵庫、佐々野長崎、野田愛知、望月廣島、加藤和歌山、林田福岡、小見山熊本、岩切鹿児島、其他一道三府四十四縣の地方自治体の頭首が一堂に會した

△四月二十七日

樟蔭女學校本科卒業生より成る櫻草クラス會の令嬢方が廿五名で和やかな文樂座の夕の集いをなさいました。

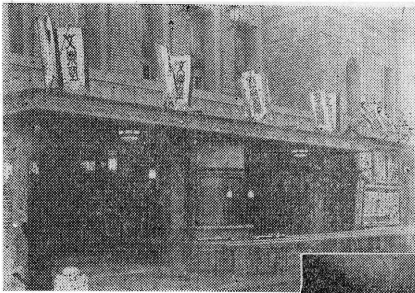
△四月二十八日

新域京大總長、下村朝日専務、中村朝日會館主事、高安六郎博士、廣江大阪放送局常務等來觀さる。松竹福井常務の説明で靜の人形を紋十郎も遣つて見せた。

△四月二十九日

四月興行も連日満員で、打上げました。さにかく四ヶ月ぶつ通しての大入りです。これも御聲援の方々の賜物さ厚くお禮申しあげます。

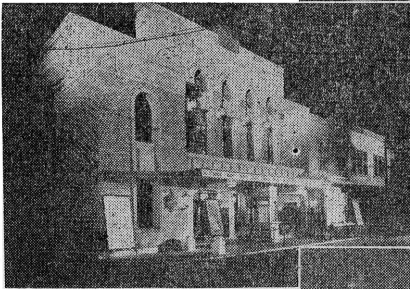
四ツ橋
文樂座
グランド
フ



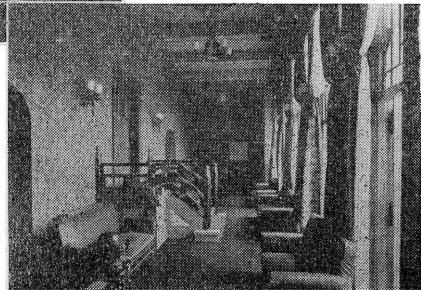
(表正面之玄関)



(通廊と休息室)



(文樂座全景)



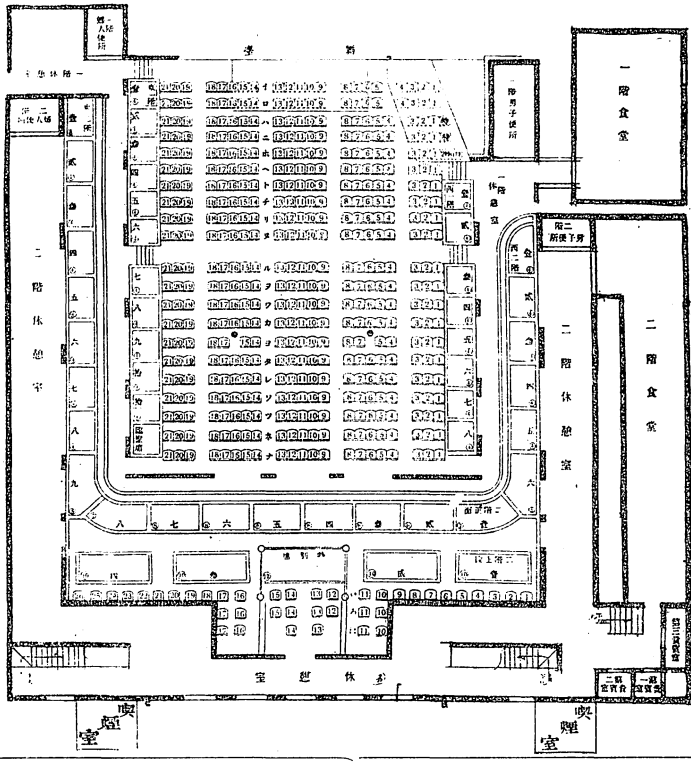
(と入口
休息室
階二)

御覧料の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物も出来、またお出入が御自由です。

前、賣切符一等お座席一等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も一等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にされます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます切符賣場一等席切符は當日、前賣も正面西側本家入口にて發賣して居ります。二、三等切符は當日正面入口にて發賣致します。尙多人數様お団体様のお申込も御相談いたします。

文樂座御場席御案内



堂殿の味趣るせ進躍へ新清りよ爛絢

會 宴 御 の 座 樂 文

スピード時代の尖端を往く

「文樂座の御宴會」

絶大なる御好評にお應へして
大衆的に進出せる新様式

(B) 金 四 圓 也 (御一人様)

一等席で御觀覽をねがひ
お食事は快美な『ランチ』
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

(A) 金 五 圓 也 (御一人様)

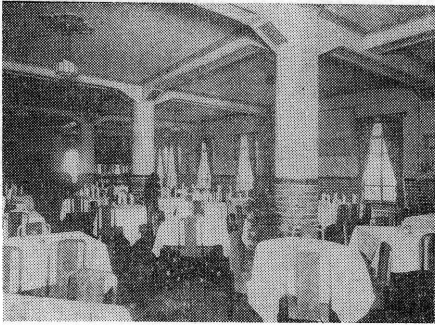
一等席で御觀覽をねがひ
お食事は皆様本位の御定食
(和食洋食兩様の設備が御座ります)
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

- お申込は二十人様以上を受付申上ります。
- 記念撮影のお寫眞は終演と同時に持歸り出来るやういたしてあります。
- お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願ひいたします。
- お申込は四ッ橋文樂座事務室へお願ひします。
- お電話の御用は前賣専用南四七一・三七八八・七四〇八番へ

南一直營

文樂座

食堂御案内



貳階洋食堂

スビードダイナー	一、五〇
(御定食)	三、五〇
ス	時價
魚フライ	時價
海フライ	時價
オムレツ	三、五〇
コロツケ	三、五〇
ビーフカツレツ	三、五〇
チキンカツレツ	三、五〇
ビーフステーキ	五、〇〇
カレーライス	三、五〇
チキンライス	三、五〇
コールドチキン	五、〇〇
コールドビーフ	五、〇〇
ハムサラダ	五、〇〇
マカロニチース	三、五〇

此外お好みに應じ調進致します

壹階和食堂

吸付辨當	一、〇〇
御食事	二、〇〇
茶碗むし	五、〇〇
親子丼	五、〇〇
お吸物	三、〇〇
卵の花汁	三、〇〇
むし壽司	五、〇〇
にぎり壽司	五、〇〇
ちらし壽司	五、〇〇
雀すし	五、〇〇
鐵火卷	五、〇〇
特アサヒビール	五、〇〇
菊正宗	三、五〇
洋酒	各
コーヒ	一、〇〇
ケーキ	二、〇〇
アイスクリーム	二、〇〇
ダイヤレモン	三、〇〇

御豫約

一幕前にお豫約願ひますとお席を設けてお待ち致します(御豫約は食堂入口で承ります)

(館別西は堂食)

文 樂 座 使 用 規 定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス
但シ長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ
但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出アラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用テ必ず其ノ設備ヲシテ戴キマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備ヲサレル事ガ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用済ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、若シ之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ、費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人数以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任ゼマセヌ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝 (自正午 至午後五時)	夜 (自午後六時 至同十一時)	晝 (自正午 至午後十時)
文樂座	約 850人	平日	80 圓	100 圓
		土曜	80 圓	110 圓
		日曜 祭	90 圓	110 圓

◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具	備 考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺	晝 夜	1回	10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同	晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ	晝 夜	1回	20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺	10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺	5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺	3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺	2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本	1圓
セラチンペーパー		1枚1回	1圓
大 衝 立	晝 夜	1對	5圓
演 壇 設 備	同	1回	2圓
其 他	必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛		16圓
冷風裝置使用料			無料
暖風ラゲエータ使用料			無料

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合いますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。廊下及び場内御散策の際は二階西側休憩所前にお化粧室が御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携品は

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。お帰りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帶願ひます。

お席券は

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居ります。お場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。

案内人は

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げます。から御休憩所でお自由にお飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶対にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合、乍勝手代役にて相勤めます。から、豫め御諒承願ひます。

當座御使用

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。

**お電話は
自働車の
御用は
露臺にも**

正面西側本家茶屋階段下に御座います。文樂座指定の均タクが新車を揃えて立關にお待してゐます。爽やかな休憩所が御座います。

四ツ橋 文樂座

前賣切符専用電話南四七一一番

電話南 七四〇八番
三七八八番

◆ 文樂座御ひるき名簿募集 ◆

- 一、お申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい。
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。
- 一、會費其他一切申受けません。
- 一、宛名は大阪市南區四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部
わかる唯一の文獻

「文樂今昔譚」 特價金貳圓

美しいグラフィック月刊
興味ある好讀物雜誌

道頓堀 一部 金三十錢

美しい原色版數度刷
美しい文樂座の包裝

文樂の繪葉書 二枚組 金十五錢

昭和五年五月二日印刷 大阪・四ツ橋・文樂座 大阪市西區土佐堀通一丁目
昭和五年五月三日發行 編輯兼發行人 大塚良三 印刷者 永井太三郎 大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

本誌へつた廣告御載希望の向は文樂座編輯部へ希すま

あゆら印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目
長三〇八三番
四九四〇番
四九四一番
(44) 土佐堀



若く明るい顔に
るぶに

粉白トール



店商平贅尾平 京東